

令和3年度 博士論文

脳死の表象

東京藝術大学大学院美術研究科 美術専攻 油画研究領域 壁画
山崎千尋

目次

序	1
研究目的	1
第1章 研究背景	3
第1節 死の解像度	3
第2節 死の曖昧さ回避	5
第2章 脳死とは何か	9
第1節 脳死の定義——脳死におけるラング——	9
第2節 脳死は人の死であるか——脳死合意から移植合意へ——	11
第3章 脳死と芸術	16
第1節 死の表象の営みと芸術が可能とする強度	16
第2節 脳死の恒久性	20
第4章 脳死と失踪	25

第1節	擬制としての脳死と失踪	25
第2節	あいまいな喪失	26
第3節	失踪の恒久性	27
第5章	<u>NO/W/HERE/CAT——そこにいる（いない）猫</u>	<u>31</u>
第1節	死の認知不可能性	31
第2節	現代社会における暴力の不可視性——トンネル	35
	<u>おわりに</u>	<u>39</u>

序

西洋世界で教会が解体されると共に広がった、我々が時に“art”と呼ぶものはその性質上、時代の節々で〈死〉というテーマを取り扱ってきた。書き出しをこのように始めると、思い浮かぶのはメメント・モリやヴァニタスなどの頭蓋骨をモチーフとした絵画であろうか。現在でも〈死〉というモチーフを取り扱う美術作品は世界中のアーティストが発表しているが、死の確実さを記号化するために召喚されるこれらのオブジェクトは本研究が題材としている曖昧な生/死、「脳死」を描くには不向きなように思える。脳死現象が60年あまり議論され続け、それでいて明確な整理がなされていない最も大きな原因の一つとして、生物学的な意味での活動が不可逆的に停止していながら、感覚的には「死んでいるように見えない」という問題がある。現状、人は対象が生きていると知覚するために、生命の定義が科学的にどのように語られているかにかかわらず、心拍のような不規則な運動や、体温を有しているか否かで対象の生死を判断する向きがあり、この感覚と矛盾する生死を受け入れ難い。逆に人間の生命への価値観が変化すれば、脳死問題そのものが消失する可能性もあるだろう。医療技術の発展無くして〈脳死〉という概念が生まれ得なかった事を鑑みれば、脳死下臓器移植が推進される時代の流れの中で実践的に概念が変容し、脳死状態が感覚的にも死であると一般化されるようになる可能性も十分に考えられる。

〈死〉の表象について取り組むことが芸術の最も重要な任務の一つであるならば、脳死問題の登場によって自明性が崩壊した〈死〉がいかに表象可能であるかについて、美術研究の立場から検討することは有効であると考え。本論はこのような問題意識を持つ表象論である。

研究目的

〈脳死〉とは頭部外傷や脳卒中などによって、人間の脳幹を含めた脳全体の機能が不可逆的に喪失した病態の事である。この概念は1950年代の終わり頃、朝鮮戦争の最中急激に発達した人工呼吸器が医療現場に普及された事により「超過昏睡」「不可逆昏睡」などの言葉で認識されるようになり、従来の呼吸停止、心停止、瞳孔の拡散固定を基とする三兆候を死の概念と認識していた世界各国を混乱させた。日本では1968年に脳死者から心臓移植をおこなった医師が殺人罪で起訴されたいわゆる「和田心臓移植事件」で大きな注目を浴び、臓器移植という実践的な課題と共に立法をめぐって議論が繰り広げられた。2009年に改正された「臓器移植に関する法律」では臓器移植の場面においてのみ脳死＝人の死と定義されており、2021年現在、国内での脳死下臓器提供件数は累計796件¹にも及んでいる。脳死状態を

人の死とする最も有力な見解は「有機的統合性」という生理学の概念を基礎に据えたアメリカ大統領評議会報告書『死の定義』[1981]²が提示するものであるが、この見解については脳神経学者アラン・シューモン(D. Alan Shewmon)³によって明確に批判されており、この批判については日本でも生命倫理学者である小松美彦らによって紹介されている。ここまで議論の推移を振り返ってみると、脳死現象が観測されてから 60 年あまり、いまだに私たちはこれを人の死か否か整理できていない事がよくわかる。本論はこのかくも曖昧な生/死を、美術作品は如何に表象可能であるかを問うものである。

-
- ¹ 日本臓器移植ネットワーク「脳死臓器移植の分析データ」(2021 年 12 月 31 日)
[<https://www.jotnw.or.jp/data/brain-death-data.php>](最終閲覧日 2022 年 2 月 1 日)
- ² President's Commission for the Study of Ethical Problems in Medicine and Biomedical and Behavioral Research, Defining Death: A Report on the Medical, Legal and Ethical Issues in the Determination of Death (1981)(構成健康政策局総務課監訳,1991「死の定義——アメリカ、スウェーデンからの報告」第一法規出版)
- ³ Shewmon, D.Alan. 1998. "Chronic 'Brain Death': Meta-Analysis and Conceptual Consequences" *Neurology* 53(6): 1538-1545 (小松真理子訳, 2008「長期にわたる「脳死」——メタ分析と概念的な帰結」『化学』第 78 巻第 8 号, pp.885-899)

第 1 章研究背景

第 1 節 死の解像度

母から父が危篤であるという電話があった時、わたしは友人宅でシャワーを浴び、髪を乾かし、もう布団に入ろうとしていたところだった。

大学に入るまで部屋を 3 人兄弟でシェアしていたわたしにとって一人暮らしの下宿先はあまりに退屈で、授業が終わり、決まった友人たちと遊んだ後は大体、大学から一番近い友人の家に泊まることが日課となっていた。大学は都内から電車で 1 時間ほど離れた山奥にあり、最寄りの駅には何にもなくて、マクドナルドだとか、カラオケなんかに行くためには利根川を渡って別の街に行かなくてははいけないし、とはいえ気の知れた友人はみんな大学の近くに下宿していたので繁華街に繰り出す理由も上手く見つけられず、誰かの家にわけもなく集まり、みんなでお酒を覚え合うことが目下私たちに設けられた課外授業であるかのように考えていた。

母がまるで何某かの任務を果たすかのようにはっきりとした口調で話すので、私もつられて「はい、はい」と仰々しく相槌を打ったが、その内容はあまり理解できていなかった。とにかく父が事故で新宿の病院に入院しているので始発でこちらに来てほしいとのことらしい。私は頭の隅でこのあと数時間の予定を整理し、電話を切った。

友人は私から電話の内容を聞き、明日に備えて少しでも寝た方がいいとわたしを気遣ったが、とても寝られる気になれないことを伝えるとコーヒーを二人分淹れてくれた。キッチンでコーヒーを飲みながら少し死について考えてみたが、わたしはそれを直ぐに諦めて、2 本目のタバコに火をつけた。始発までの途方もない時間の中で、わたしたちは今話すべき話題も見つけられず、だまって換気扇が回る音を聞いていた。

早朝の病院は閑散としており、忙しそうにしている看護婦のスリッパの音が時折パタパタと聞こえるぐらいで、ずいぶん寂しいところだった。蛍光灯の光が暖色であることが唯一救いだな、とわたしは思った。

受付で父の息子であることを告げると、パスワード付きの重々しい扉がついた部屋——おそらくこれが集中治療室というものなのだろう——に案内される。一番奥の隅のカーテンの先に、大きなベッドで眠る父と小さな椅子でうなだれる母がいた。母はわたしに気がつくと、電話の時とは逆に小さな声で「お父さんそこ、見てあげて」と言った。

父の顔は大きく膨れ上がれ、個人が特定できない程造形が変容していた。肌の色が所々変色しており、見るも無惨な姿であった。いままで出すことのできなかった涙と共に「なんで」という言葉がどっと溢れ、埃ひとつない床にこぼれ落ちた。

眠る父を抱きながら、父が出張先のホテルの一室で同僚と殴り合いの喧嘩をしたこと、二人とも酒に酔っており、打撃を受けすぎた父の脳に異常が出たこと、相手は無傷だったこと、病院に運ばれた時には危篤状態で、今父は薬と心肺蘇生でなんとか生き延びており、このままだと脳死状態になるということだけ聞いて、後のことは母にもわからないようだった。わたしは一切を腑に落とせぬまま一通り泣き尽くし、今日明日、父の容態がどうなるかわからないとのことだったので、幾つかの約束を断る為友人に電話をかけた。

それから数時間後母と黙って父を見守っていると、母の携帯電話に叔母から着信がかかってきた。通話のために一度部屋を出る。わたしと父の二人きりになった。

点滴が取り付けられた父の手を握ってみる。布団の上から触れた時には気づかなかった低い父の体温に驚き、思わず両手で摩った。もし父の容態が好転する行為があるのなら、今のわたしは何だってできる、と思いながらもそれは見つけられず、冷たくなった父の手を握ることさえ無意味であることは明白であった。

それからほどなく、父と繋がった心拍計が何か突然思い出したかのように激しく反応を示し、騒がしく部屋にサイレンを響かせた。わたしが父の体に触れた際、どこか動かしてはいけない場所に触ったのだろうか。きっとそうに違いない。わたしが勝手に触ったから。そう思って怖くなり、看護婦に助けを呼ぶ声を出せずに、ただその光景を眺めることしかできなかった。心拍計の音に気づいた看護婦が医者を呼び、落ち着いた様子で父のベッドに歩み寄る。まるで餅をこねるかの様に片手で父の胸部を乱暴に、激しく押し、ガシンガシンとベッドが鳴った。十数回それを繰り返した後、蘇生が完了したのを確認し、部屋に戻ってきた母とわたしを医者は近くの小部屋に呼び寄せた。その部屋は入り口と対面に別の扉があり、テーブルと椅子以外には何もなくて用途が全くわからない構造になっていて、どことも不安にさせる空間だった。部屋というよりは廊下に近かったかも知れない。医者が一言、これ以上蘇生を続けるか否かをわたしと母に問うた時、私は母の肩で再び泣いた。

わたしと母が蘇生の中止を申し出ると、父はすぐに死んだ。わたしの判断によって死んだのだから、父を殺したのはわたしかも知れない。看護婦は父が病人ではなく死人になったことで別の服に着替えさせる必要があると説明し、わたし達に病院内の売店でその服を買ってくるよう指示をした。母は上手く歩けなかったのでわたしに半分抱かれながら二人で売店に向かう。その売店は病院入口近くの、至極普通のコンビニみたいな場所だった。そろそろ昼を迎えようとしていたので、多くの人がご飯やら日用品を買い求め、少し混んでいた。売店の隅の下棚にその服が積まれているのを発見し近づいてみる。M と L があった。「千尋、どうしよう。どっちを買ったらいいと思う？看護婦さん何も言ってなかったよ。わからない、お父さん——」わたしが理性的にならなければと直感した。それはまだ10代のわたしには見せたことがなかった母の姿であった。「Mにしよ。Mでいいよ。お父さんの体ならMでいいと思う。看護婦さんにだめだって言われたらもう一度来て買えばいいんだよ」

結局わたしとわたしの家族はあの日何が起こしたのかまったくわからぬままであった。葬式、裁判などを淡々と終え、当たり前のように明日を迎え続ける日々の中で、わたしは人が死ぬことについて考えたり、そしてそれを諦めたりを繰り返した。写真に手を合わせながら、傍聴席で加害者の発言を聞きながら——ひどく泥酔していたので加害者は事件のことを何も覚えていなかった——。考えれば考えるほどにわたしにはわかる事ができないという事がわかる一方であった。人は死んだ時、生きていないのだから、死を体感することは不可能である。その事は今まで色々な事を身体を使って知覚してきたわたしにとってとてもつらい現実だった。父の一件で、何か途方もないことが起こったような気もする一方で、わたしは何も理解せず、何も得ず、あるいはなにも失わず、なんでも瞬時に知ることができる高度情報化社会に生きていながら、その実『人は必然的に死ぬ』という事でさえよくわかっていないような気がした。

この時感じた虚無と向き合うことが私の制作する全作品のモチベーションである。

第2節 死の曖昧さ回避

あるいは、そのような社会だからこそ、私たちは死と距離を縮める事ができないのかもしれない。たとえば、インド、ガンジス川では日常的に人間の死体が流れていると言う。この営みは遠く離れた日本で生活している私たちでも朗然たる事実として知り得るものだ。だが私たちはその事を本当に“知っている”のだろうか。私が生きた30年間で日本では約3千2百万人の人々が死亡した⁴らしいが、そのうち私が目にした遺体は父や祖父母、友人など含めてたった数人である。人間の致死率が10割であることは論を俟たない。だがこの国で遺体を目の当たりにすることは、特殊な職についていない限り難しいだろう。たとえ見ることができても、それは悲壮や驚愕にまみれ、滲み、不明瞭であることが殆どだ。文明と愛が私たちの知覚を、死を知る機会を妨げている。私は知覚不可能性、死の曖昧さを回避



図1 制作風景



図 2 火葬場と詐欺師

(disambiguation) するために親族や知人、愛する者の死ではない死、他人の死体を観察する必要があると強く感じ、この 3 人称の死、誰かの死をリサーチする旅行そのものを一つのプロジェクトとして企画した。具体的には、まずインターネットで遺体の画像を収集し、ガンジス川に流れているであろう死体の絵を想像で描き、描いた絵を片手に実際にインドに渡航し、本物の死体を観察しに行く(図 1)。本プロジェクトではその旅行記をアーカイブ展示することを最終目標としていた。

目的地インド・バラナシに到着し、ガンジス川のほとりで私を待ち受けていたのは大量の観光客と詐欺師であった——ガンジス川に死体を流すと言う風習は確かに存在してはいたが、実際に水葬されるのは妊婦や、幼児、蛇に噛まれた者など、ある特定の条件で亡くなったものだけであり、基本的には川に隣接された火葬場で遺体を燃やし、その灰を流すのがほとんどで、滞在期間中遺体が川を流れているという光景を見ることはできなかった。とはいえ、他人の焼かれる姿を見ることはここでしかできないと思い、火葬場へと足を運ぶと、突然二人のインド人に声をかけられた。私が首からぶら下げている大きな一眼レフカメラで記念写真をとって欲しいとのことらしい。カメラを持ちながらインドを旅行するとこのような事は日常茶飯事ではあるのだが、火葬場では写真撮影は固く禁じられていて、その事をよく知っていた私は彼らの要求を強く断るが、彼らにしつこく「大丈夫、私たちは現地の人間だ、問題ない」と説得され、結局二人の姿を撮影することになる(図 2)。シャッターを切ったその直後、ファインダーを覗いたままの私に後ろからもう一人のインド人が声をかけた。彼の

「ここは撮影禁止だ、お前を逮捕する」という言葉に、慌てて事情を説明しようと、正面に振り返ると、撮影した二人の姿は既になく、続け様に「許して欲しければ金を払え」と言われた時、たった今自分が詐欺の被害に遭っているということを理解した。無視してその場を離れることにする。詐欺師にはもう慣れた頃だったが、驚いたのはその周辺にいたインド人十数人が私の体を掴んだり、頭を叩いたりして逃さないようにしたことである。神聖な火葬場において、その周辺にいた人物は皆詐欺師であったという事実には愕然としながら私はその場を後にした。インド人、ヒンドゥー教徒の死生観に憧れを持ちながら、はるばる日本から渡航してきた私としては、その信仰心を餌にしながら、集団的に詐欺行為を働いていたガンジス川周辺のコミュニティに強く絶望し、目指した先に存在したのは期待していた死の実存ではなく、虚構そのものであると感じざるを得なかった。

帰国後私は展覧会で予定通り旅行のアーカイブを写真にて展示したが、事前に描いた絵画が捉えられたその記録写真には派手に合成加工、いわゆる「雑コラ（雑なコラージュ）」を施し、旅行そのものが嘘であるかのような記録集を制作した(図3)。インターネットで死を想像しながら描いた絵画は死の虚構であり、言わば“死を知らない絵画”であるが、展示会場ではその虚構と現実の構造が真逆に入れ替わり、アーカイブそのものが虚構であり、確かなものは描かれた絵画だけという作品である。死の曖昧さを回避するためのプロジェクトはむしろその曖昧さを増幅させる旅となった。



図3 「墓場からゆりかごまで」

こうしたプロジェクトの他にも幾つか、父の死の体験した虚無を体現した作品の制作を試

みるものの、どの作品も悲壮感や作家の私小説的な表現の域を超えず、死を描く上での普遍性、通時性を欠くものが多かった。父の死を測る客観的なものさしを探していた私は、父が死ぬ前に陥った切迫脳死というテーマに取り掛かった。本章では散文的に私が死をテーマにする動機にあたる経験について語ったが、次章では本論の本質的なテーマである「脳死現象を描く」ということは如何なることなのかについて記述する。

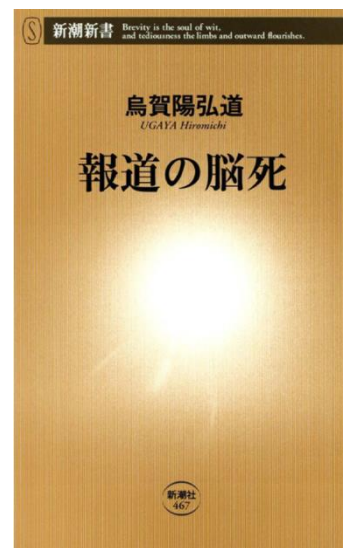
⁴ 政府統計の総合窓口(e-Stat)「死因（死因年次推移分類）別にみた性・年次別死亡数及び死亡率（人口10万対）」[<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411656>]（最終閲覧日2022年3月30日）

第2章 脳死とは何か

本章では、〈脳死〉を主題とした美術作品の制作論を構築するにあたり必要な論点の所在を明らかにする。本論の命題である「脳死は美術作品によって如何に表象可能であるか」に対して、まずはその問いの妥当性を検討するために、〈脳死〉の「死を題材としてきた諸美術」との通時性について言及する必要があるだろう。この考察は「脳死は人の死か」という所謂「脳死問題」の議論と合致するため、主に「脳死問題」を傍観し、歴史的な経緯の整理を行う。

第1節 脳死の定義——脳死におけるラング——

2021 年現在、月間アクティブユーザー数が 4500 万人を誇るソーシャルネットワークサービス、Twitter にて脳死という言葉を検索してみると、日本国民による 1 日約 5000 件⁵の投稿を見ることができる。この言葉が本論が取り扱っている〈脳死〉と同じものであれば、私たち日本人は死に対して驚異的な関心を持っているということになるが、無論そうではない。ここで人々が語っている脳死という概念のほとんどは、テレビゲームで戦術や攻略を考慮せず遊ぶ状態を指したネットスラングであり、そのようなプレイングは脳死プレイ、脳死プレイを可能とするようなゲームは脳死ゲーと呼ばれる。医学的な意味での脳死について真剣に考慮した事のある者であれば、このよ



うな俗語の存在に嫌悪感を覚えるかもしれないが、脳死と 図4 脳死という言葉が用いられた資料
いう不適切な比喻が飛び交うのは趣味の悪い若者の間だけではない。2012 年 7 月、MNS 産経ニュースは自民党の石原伸晃幹事長(当時)が記者会見で、民主党分裂の影響で消費税増税関連法案などの国会審議が停滞している現状について「本来なら民主党が『特別委員会をいつまでに作ります』というのがあって然るべきだが、脳死ですね」と述べたことを報道し、当該議員事務所は市民団体から抗議を受けた⁶。「〇〇は組織の癌だ」といったような病気や障害の言葉を差別的に用いる失言は社会の至る所で散見され、上記の政治家のように社会から指摘されることは少ないように思える。私も本研究の為に「脳死」と名の付く文献を手当たり次第に読んでみると、内容が〈脳死〉についてではなかった、ということが何度かあった(図 4)。しかし、私にはこれらの比喻としての「脳死」と〈脳死〉の違いを明確に示すことは想像するより容易ではないように思えて仕方がない。なぜなら現状、法的な定義上の〈脳死〉はスラングとしての「脳死」と同様に「死の比喻」と解釈することができるからだ。

「死」とは「生」と対比される概念であり、生命が無いことを意味する。字源的には「歹」（骨の断片）と「匕」（人）で構成される合意文字であり、主に人の生命の喪失において用いられるが、造語成分としては汎用的に「滅ぶこと」「消えること」の意味を持つ為、日本語では「文明の死」「帝国の死」「死語」など、ある事物の消滅を表す言葉としても使用される。また「効力を失う」という成分を持って比喩的に「死角」「死文」という熟語なども存在している。私たちが「死」という言葉を使用する時、「生命の喪失」という本来的な用法と「機能停止」という二つの用法が存在している。では「脳死」はどうであろうか。1997年に立法し、2009年に改正された「臓器移植に関する法律」⁷では以下のように記述されている。

第六条 医師は、次の各号のいずれかに該当する場合には、移植術に使用されるための臓器を、死体（脳死した者の身体を含む。以下同じ。）から摘出することができる。

- 一 死亡した者が生存中に当該臓器を移植術に使用されるために提供する意思を書面により表示している場合であって、その旨の告知を受けた遺族が当該臓器の摘出を拒まないとき又は遺族がないとき。
- 二 死亡した者が生存中に当該臓器を移植術に使用されるために提供する意思を書面により表示している場合及び当該意思がないことを表示している場合以外の場合であって、遺族が当該臓器の摘出について書面により承諾しているとき。

2 前項に規定する「脳死した者の身体」とは、脳幹を含む全脳の機能が不可逆的に停止するに至ったと判定された者の身体をいう。

この第六条は法律上の我が国における〈脳死〉の定義になっている。要約すると脳死した身体とは脳幹を含めた脳機能が全て喪失していて、かつ、厚生労働省によって定められた厳密な診断によって判定された身体のことであり、脳死と判定された身体は死体に含まれる、ということになるが、この厳密な判定とは、生前の本人の意思表示や家族の臓器移植に関する承諾によって、脳死下臓器移植を实践する為に行われる為、脳死者は法的に脳死と判定されるその前に臨床的に脳死と診断される必要がある。つまり脳死には臨床的に診断された「脳死とされうる状態」と厳密に判定された「移植を前提とした脳死」の2種類が存在し、人の死とみなされているのは後者のみである。

〈脳死〉は脳幹を含む脳機能が不可逆的に停止した状態を指し、日本ではこれだけで個体の死としない。前述した「脳死」という言葉の本来的な活用が人の死を対象とする物であるならば、脳死における「死」は臓器提供を前提とした場合には「溺死」や「過労死」、「自死」

のような文字通りの「死」であり、臨床的な脳死状態の場合には、人間の臓器の機能停止を暗喩する意味での「死」である。またそもそも〈脳死〉という病態が「脳死」という言葉で定着した歴史はそれほど古くなく、観測された当初は‘coma dépassé’（行き過ぎた昏睡、超過昏睡）や、卑俗には「力強く脈打つ死体」といった表現が用いられており、その後様々な表現が学者によって提案されたが、「脳死」(brain death)という表現が出てくるのは1698年のことである。この表現も直ちに一般化されるということはなく、同年に米国で定められたハーバード大学の脳死判定基準においては‘brain death’という言葉は用いられず、‘irreversible coma’（不可逆昏睡）という言葉が用いられている⁸。「不可逆昏睡」という言葉が脳死状態を直接的に表す言葉なのであれば、元来「脳死」は数ある俗称の中から選ばれた呼び名の一つに過ぎない。本節冒頭で記述したネットスラングとしての「脳死」はあくまで医学的な意味での「脳死」を更に比喻した物であって、これらを一緒くたにし、「脳死（スラング）＝脳死（病態）」と述べる事は差別的な暴論であると批判するのは簡単である。しかし前述したように、法的にも歴史的にも「脳死」という言葉がその現象を文字通りの意味で表してきたかどうかは疑わしい。「脳死（スラング）」「脳死（病態）」の両者を「脳が働いていない状態」と広義に括るとき、どれだけ双方に差異があるのだろうか。

80年代からマスメディアで盛んに取り上げられ、私たち日本人にとって耳馴染みのある「脳死」という言葉は、その意味解釈における規則、ラングが曖昧であり、その曖昧さが脳死の本質なのである。

第2節 脳死は人の死であるか——脳死合意から移植合意へ——

前節では日本における〈脳死〉の法律的な定義を取り上げ、脳死者には「脳死とされうる状態」と「厳密に判定された脳死」の2種類が存在することを確認し、そして前者は人の死と認められていない「脳死（機能喪失）」であり、後者は人の死と認められる「脳死（生命喪失）」である事を確認した。ここで改めて「臓器移植に関する法律」を見てみると「厳密に判定された脳死」は死体と同じという記述はあるものの、「脳死とされうる状態」に関しては明確な記述はない。寧ろ〈脳死〉とは例外なく人の死であり、「脳死とされうる状態」というものは厳密には〈脳死〉ではなく、「脳死（機能喪失）」というものは存在していないと読むことが自然であるように思える。なぜ「脳死とされうる状態」という曖昧な概念が存在し、脳死は人の死であるか否かについて問題視され続けてきたのか。この問いに取り組む為、本節では〈脳死〉において日本で立法を巡りどのような議論がなされてきたのかについて確認する。

通常、日本での臓器移植の歴史は1956年の生体腎移植に始まるとされているが、日本で脳死・臓器移植が知られるようになり、本論が脳死の議論、と呼んでいるものが一般的に周知

され始めるのは、それから 12 年後の日本初の心臓移植が行われてからの事である。日本では初、世界では 30 例目である心臓移植は、大々的にマスコミによって報道され、執刀した札幌医科大学の和田寿郎教授の活躍が讃えられたが、術後 83 日目にレシピエントが死亡してから、水難事故で脳死とされたドナーは実は生きていたのではないか、という疑惑が浮上し、和田教授は 1968 年と 1970 年に殺人罪と業務上過失致死罪で告発された。このことから、この日本初の心臓移植は「和田心臓移植事件」と呼ばれることとなる。その後、脳死は人の死か、死の判定基準は如何なるものかについて法廷で争われるものの、最終的にはドナーから心臓が摘出される際、脳死状態だったのか、それとも生きていたのか確実な証拠がなかった為に、死の基準を脳死ととるか、心臓死ととるか、の問いは省略される形で嫌疑不十分と判定された。不起訴処分の判断が 1972 年に出されるが、事件や脳死に関する真相「脳死は人の死か否か」について解明されたとは言い難く、強い疑念を残しながら日本の脳死下臓器移植は始まり、この事件以来、1999 年まで心臓、全肝臓の移植手術は日本では——一般に知られる限りにおいては——行われなかった。一方その後も生体間の腎臓、肝臓移植は盛んに行われ、米国で臓器移植が医療として定着する 1980 年代になると、日本でも脳死・臓器移植の立法化が活発になり、厚生省に大臣諮問機関「生命倫理に関する懇談会」が設置され、杏林大学竹内一夫教授を班長に脳死判定基準を検討する「脳死に関する研究班」(竹内班)が発足される。竹内班は 1985 年に報告書で脳死判定の基準を①深昏睡、②自発呼吸の消失、③瞳孔散大、固定、④脳幹反射の消失、⑤平坦脳波、の 5 つの条件が満たされ、6 時間経過を見ても変化がない状態とする医学的判定基準、厚生省基準(竹内基準)を提示、この報告書は評論家である立花隆『脳死』[1986]によって、完全に解明されていない脳機能の停止(機能死)を見ようとする竹内班の基準だけで臓器摘出を認めれば、生きている人から臓器を取り出す可能性が排除できないとし、強く批判された。そもそも当時市民団体からの反対運動も多く、立花批判に十分応える事もできなかった為、立法化の動きは停滞を余儀なくされるが、1990 年には社会的な合意形成を目指す首相の諮問機関「臨時脳死及び臓器移植調査会」を設置、1992 年、脳死を人の死として認め、包括的な法律によって、厚生省基準に基づく臓器移植を進めるべきだとする最終答申が発表され、1994 年に日本最初の脳死・臓器移植法案を国会に提出、その 3 年後には「臓器移植に関する法律」が施行される。この臓器移植法は「死亡したものが生存中に有していた自己の臓器移植術に使用されるための提供に関する意思」を「尊重」する事を基本理念の一つとして掲げており、この理念は脳死にまつわる議論において最も複雑で、解消が困難であった〈脳死〉の「社会的合意」という問題に対する一つの回答となった。〈脳死〉を臓器移植という実践的な立場で議論した場合には、医療科学技術を精査し、判定基準を厳格化する事で、人が生きている状態と死んでいる状態、そして脳死した状態、それぞれを論理的に線引きする事は可能であるものの、〈脳死〉を思弁的に議論する時、つまり脳死は人の死であるか、という議論ではこれまで、医師

が不定形な社会通念に従うとしか結論が出せなかった。しかし脳死者、あるいはその家族に「臓器移植の意思」の判断を委ねることにより「社会的合意」を「脳死合意」から「移植合意」に移行させ、合意形成を法律化したのである。この指針が、今日における日本の脳死に対する振る舞いを位置付ける事となる。

臓器移植に対する立場を明確にしたところで、今度は実際に脳死下臓器移植を増加させる為に法改定が行われた。というのも 1997 年の法律ではドナーになる者の書面による同意がなければ、家族が同意していても移植は行えず、また、法的な同意は民法（第九六一条）の遺言能力の規定によって 15 歳以上にしか有効ではなく、これらの厳しい条件では実際には脳死下臓器移植は増えなかったのである。またこの法改定の動きには 2008 年に発表された国際移植学会による「臓器密売と臓器ツーリズムに関するイスタンブール宣言」が大きく影響した。これは豊かな国の人間が貧しい国の人々から臓器を買うための渡航ツアーが横行し、臓器の密売やドナーの人身売買などが問題化したことを背景に、国際移植学会が中心となってイスタンブールで開催された国際会議で採択された宣言で、その中では臓器提供、移植を自国で自給自足に努めるべきだと言及がなされており、世界的な倫理に従う形で法改定が後押しされたのである。

改定案の段階では〈脳死〉を一律に人の死と定めることを含める包含法案が提出されるが、実際に法案成立段階では臓器移植に関して本人、あるいは家族の同意があった者だけという限定的な定義は残しつつ、提供の条件を家族の同意に比重を置く現在の法案が成立される。ここまでの立法を巡る我が国での議論の大まかな推移である。

	1997 年 臓器移植法	2009 年 改定臓器移植法
本人の書面による 同意あり	遺族の同意があれば 提供可	遺族の同意があれば 提供可
本人の書面による 同意なし	提供不可	遺族の同意があれば 提供可
15 歳未満	提供不可	遺族の同意があれば 提供可

図 5 1997 年旧臓器移植法と 2009 年改定臓器移植法との臓器提供条件の比較

1997 年に施行された旧臓器移植法と 2009 年に改定された現臓器移植法の要点をまとめたものが（図 5）である。この図から分かる通り、改定された臓器移植法では臓器移植、及び脳死判定の実施は脳死者家族の合意に重点が置かれており、この法が「脳死＝人の死」の是非を問うているのではなく、寧ろその問いを介することなく社会合意を形成し、脳死下臓器移植を推進するために機能している事が一目瞭然である。

本節では日本での脳死に関する立法をめぐる議論がどのように存在し、批判がされ、判定基準の厳格化を進めたかについて代表的な動きを確認したが、同時に〈脳死〉が人の死であるかどうかという思弁的な問題に関しては決定的な結論は出ないまま、社会通念に従うという方向性を一貫しており、現在においては「脳死合意」という問いを「移植合意」という問いに移行させることで、家族の承諾という「社会的合意」を形成しているという事についても確認した。前節で取り上げた臓器移植法の第六条では脳死判定を行なった者の身体は死体に含まれると明記されているが、あくまでその判定は家族による意志に依っており、法律の構造上、脳死者が本当に死んでいるか否かは個別の家族の死生観に委ねられている。その意味で現行の我が国では、法律上明記されておらずとも「臨床的脳死者」と「厳密に判定された脳死者」の二者が存在しているのである。もっとも、現在の医療現場では「臨床的脳死」は「脳死とされる状態」と言い換えられており、これは「脳死とされうる状態」の者は厳密には脳死者ではない、という意図が含まれているが、実際の個別の家族が直面するのは末期症状の患者か脳死者かという選択ではなく、家族を脳死者と認めた上で、臓器移植に合意するか否かの選択に他ならず、この言い換えは脳死における思弁的問いから家族を遠ざけるための印象操作であると判断することが妥当であろう。脳死下臓器移植を推進する過程で「脳死は人の死であるか否か」という問いは省略され、その為に「脳死」という言葉は「臨床的脳死者（機能喪失）」と「厳密な脳死者（生命喪失）」という二つの概念が同時に存在するが故に、その意味解釈の規則、ラングが曖昧になっている。そしてその曖昧さがそのまま本論における「脳死を主題とした美術作品」という宣言の曖昧さに直結しているのである。

いささか言葉尻を追うような記述をしてきたが、本論で言葉の活用について執拗に記述する理由は本論の「脳死を美術作品によって表象する」という宣言の妥当性を検証するために重要な作業であると考え。なぜなら、この宣言にはそれだけで、「これまで多くの芸術作品が〈死〉を主題として取り扱ってきたのだから、脳死を対象とする事は現代性をもちつつも芸術の大きな物語に還元されるものである」という意味合いが含まれており、ともすれば「脳死を描いた美術作品はそれだけで芸術作品である」といったような傲慢な立ち位置を形成しかねないからだ。〈脳死〉＝〈死〉という構造は脆弱である。脳死が人の死であるか否かは少なからず我が国では曖昧であり、言語的にも比喻表現に過ぎない。もし、〈脳死〉という現象が「脳死」と呼ばれず、文字通りの「不可逆昏睡」という言葉で定着していたとすれば「脳死を描く」という宣言に含まれる芸術作品としての自明性は直ちに崩壊してしまう。また、そもそも本節で確認作業をするまでもなく、〈脳死〉というものはこれまでテレビドラマ、映画、報道など、あらゆる分野で表象されてきた。これらの作品的なものたちとの差別化を避けて芸術論を論述する事は困難であろう。本論を芸術論として確立させる為には〈脳死〉がただそれだけで言語的に諸芸術の文脈に内包されるということ以外の、より

説得的な根拠が求められる。

- ⁵ Yahoo! JAPAN 「Yahoo JAPAN リアルタイム検索」
[<https://search.yahoo.co.jp/realtime/search?p=%E8%84%B3%E6%AD%BB>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ⁶ 臓器移植法を問い直す市民ネットワーク「「脳死」を比喻として用いることへの憂慮」
[<https://blog.goo.ne.jp/abdnet/e/3c4d37b8136e93fbf8908a8e28bdf961>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ⁷ e-GOV 法令検索「臓器の移植に関する法律」(2015 年 8 月 1 日)[https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=409AC1000000104_20150801_0000000000000000] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ⁸ 立花隆,1988「脳死」中央公論新社,p.45

第3章 脳死と芸術

本章では前章を受けて〈脳死〉がただそれだけで言語的に諸芸術の文脈に内包されるということ以外の、より説得的な根拠について検討し、その上で「脳死の恒久性」という点についても取り上げる。「脳死問題」における議論は過渡期を迎えているのか、研究対象としての有意性について言及する。本章の作業は、本論の意義についてもう一つのアンチテーゼを論じるものである。

第1節 死の表象の営みと芸術が可能とする強度

人は死者の表象をどのような営みの中で実行してきたのだろうか。美術作品、作家にまつわる〈生と死〉というテーマは古代から現代まで数多く、その一つ一つを検証することは本論においては手に余る作業であるが、本論文での考察が言語的な意味で接続されうる「〈死〉を題材としてきた諸芸術」から解放され、より根本的な芸術論として説得的な根拠を得る為に、イメージについて「人類学 (anthropologie)」の名のもとで研究したハンス・ベルディングの『イメージ人類学』[2002]、特に「^{イメージ}像と死」のCHAPTERにおいてどのような概念が語られているかをまずは確認する。

ベルディングは人々の死者の表象の営みをこのように語っている⁹。

死者はもとよりつねに不在者でしかなく、死とは耐えがたい不在であるので、これに耐えようとしてひとはこの不在をイメージによって満たそうとする。〈中略〉そして、^{イメージ}像によって死ぬ事ない身体を与えたのである。(ベルディング 2002 pp.188-189)

ベルディングのイメージにまつわる研究は「イメージ・メディア・身体」の3つの概念とその相互関係を基礎に据えている。ベルディングにとって「イメージ」とは物体として固定されるものではなく、また人々の間を浮遊するようなものでもない。それは支持体としての「メディア」と、私たち人間が自身の「身体」を通して生み出す固有の内的想念との間の動的な緊張関係の中で、その都度状況に応じて変容しながら成立するものである。一般的に同一視されることの多いイメージとメディアを区別し、イメージはメディアからメディアへと遊牧民(ノマド)のようにその実現の場を求めて移動するものであるとしている。そしてイメージはわれわれ自身の身体に宿るものであり、人間がイメージを所有しているのではなく、人間の身体は「イメージの場所として」イメージに占拠されている。われわれはメディアを通してイメージを知覚するのではなく、われわれ自身の身体がイメージを現像する

メディアであるという考えに倣って、前述した「^{イメージ}像によって死ぬことのない身体」を考察すると、私たちが死を目の前にしたとき、その人間のイメージがどのような過程を経て変容し、交換されるのか、より明確に理解できるだろう。つまり、その人間が生きていた時にその人間のイメージを現前させていた身体が死体へと変化したとき、それはもはや身体ではなく、身体のイメージであり、その代わりにわれわれは象徴的身体の制作によって、その者の不在のイメージ、死者の表象を可能とする。これが共同体への社会復帰を取り戻した死ぬことのない身体の実現である。現代社会でわれわれ日本人が身近に感じる例でいうと、それは例えば遺影写真であろう。死体はすぐに解体し始める身体と酷似するものである事と比べ、その瞬間までその人間の現前を表していた肖像写真は、不在を表す身体へと変容する。この死者の不在に永続性を付与する行為が、人々の死の表象における一般的な営みである。イメージによって永続的な身体を付与する事が人間の死者に対する営みであるというベルディンクの言説を確認した上で、さらにこれと類似する概念を自身の企画展示にて宣言している岡崎乾二郎の「墓は語るか（墓とは何か）。」¹⁰について言及し、死を表象するという行為の中で、どのようなアプローチが芸術としての強度を持ちうるのかについて検討を試みる。

2013年に武蔵野美術大学美術館にて開催された展覧会「彫刻と呼ばれる、隠された場所——墓は語るか」は日本で活躍する彫刻家7名による企画展であり、展示内でのコンセプト展示と名付けられた区間では「墓」という概念をテーマに古代イタリアから現代に至る本質を照らし出す多様な作品が展示された。そのコンセプト展示の会場に掲げられた、企画者である岡崎乾二郎のステイトメントには墓の本質について、生ある人たちの属する現世に向けられた表現にあるのでない、という書き出しで墓の働きが時間による推移に決して属することのない別の時空（彼岸）をそこに内包（秘蔵）することにあることを書き記されており、その具体的な説明として独自の例を挙げている。

（たとえば、はるか二千五百年前の墓に「ぼくは、今もきみを愛している」*と記されていたと想像してみよう。もちろん、その文の示していたはずの話し手である「ぼく」も言葉が向けられたはずの「きみ」もとっくにこの世にいない、けれど、その文の「今も」は二千五百年前の今ではなく、その墓碑銘をわたしたちが今、読んだ、その今を（今も）指している。すなわち、この文の中の「ぼく」も「きみ」も、特定できる人間としてはとっくに世を去って不在不明になっているが、その文を読むわれわれにとって、「今も」はまさに今であり、であれば、その文の意味である愛——「愛している」も、この今、いまだに持続し、読むたびに再生しているのだ）*榎図かずお『わたしは慎吾』（岡崎 2013）

不在のイメージに関して、ベルディングのような、墓、死者のイメージ、身体についての相互関係を分類するといった方法論ではないものの、墓碑銘に刻まれた言葉、そこに込められた愛が刻んだ本人の身体（だったもの）の有無に関係なく、鑑賞者の存在によってたった今再生され続けるという原理の分析は、死者の不在を永続化させる死の表象と類似する概念として考えられるだろう。岡崎はこのような墓に関する分析の後に、さらにこのように続ける。

芸術の意味は何かを記録する事ではない。現世に生きる誰かの似姿（現世の誰からも認知されうる）を作る事でもない。現世において認知されうる「何か」＝アイデンティティを脱落しても、なお持続する感覚の強度こそ実現する事なのだ。（岡崎 2013）

一般的に死生観がその土地の文化の様相によって変容するように、墓の表現は近世において大きく変貌し、墓碑が持つ意味は忘却される可能性がある、という事と、芸術や文化がひたすら現世的関心の組織に向けられていくことを重ね合わせながら、岡崎は死の表象を手がかりに芸術（彫刻）の条件として上記の役割を明確に提示している。

また、『美術フォーラム 21』¹¹で当時美術館研究員であった保坂健二郎は美術作品を墓石と比喩した岡崎とは対照的に、美術館＝病院という指摘をしている。

今や美術館の主流を占めるようになったホワイト・キューブの空間の特性は、その「無个性的な個性」にあるのと同時に、時間軸を一切持たないことにも指摘できる。漂白された空間の時間制は宙吊りとなったまま静止しており、墓所というよりはむしろ、延命治療を施す病院に近い。ホワイト・キューブの空間に立ち入るたびに違和感を覚えてしまうのは、いつかは終わる有限の時間軸を背負う人体が、静止したまま無限に存在するかのごとく装う空間に身を置いたことに対して整理的な抵抗を示すからである。（保坂 2003）

このテキストは哲学者テオドール・W・アドルノが『プリズメン——文化批判と社会』[1996]で「美術館（Museum）」と「霊廟（Mausoleum）」の発音上の類似に基づき美術館を芸術作品の墓場と評したことを受けて、美術館のディシプリンを再考するために寄稿されたものであり、美術館（美術作品）を墓所（墓石）、あるいは病院（患者）という役割からの逸脱を講じるものであるが、この論考の中で保坂が、画家である小林正人の《Unnamed #9》《Unnamed #15》（図 6）¹²に言及している点は非常に興味深い。1999 年「Serendipiteit」



図 6 小林正人《Unnamed #15》1999「Serendipiteit」展（ベルギー、ワトー、1999）

展（ベルギー、ワトー）や 2000 年に宮城県美術館で開催した回顧展にて敷き詰められた藁の上に設置されたこれらの作品は幼子イエスの誕生した馬小屋を彷彿とするようなインスタールが施されている。本テキストのなかで美術館が取り戻すべきディシプリンを観者の感性的体験と設定した保坂が美

術館の目指すべき場所として埋葬や延命の場ではなく誕生に立ち会う場を提案しているが、現代において人の誕生を担う場所は奇しくも病院である。

2021 年 8 月、世界が新型コロナウイルスの蔓延によって混乱している只中で、我が国では妊娠中に新型コロナウイルスに感染し、自宅で療養していた妊娠 8 カ月の 30 代女性が、入院先が見つからないまま、医師ら不在の状態ですぐの出産を余儀なくされ、新生児が死亡したという悲しい出来事が報道された¹³。とても残念なことではあるが、2021 年の現代人の生・死へのまなざしは、もたらされる祝福や悲嘆ではなく、それらを曖昧にしながら延命することに向けられている。保坂がこの論考の締めくくりに“「もっと明るさ」をと叫べない限り、美術館の蘇生はない”と記した言葉の通り、私たちの芸術へのまなざしも、延命や埋葬を介した存在の永続性に向けられており、その範疇を超える事はないのかもしれない。人々の死の表象における根本的な営みは不在の永続的な再生によって行われ、作品をある種の生命と見立てた時、美術（館）に求められるディシプリン（可能であるべき最低限の事柄）は現代においても墓石（墓所）、あるいは患者（病院）と同一である。作品が芸術たりうる条件というのは、究極的には誰にも定義することはできず、歴史的にある作品が芸術だったという事が語られる現象があるだけだが、本論が脳死という言葉それだけをもって芸術としての歴史に還元させる事なく、芸術論として確立させるために、本論では仮説的に、この岡崎や保坂が語る「持続する感覚（体験）の強度の実現」がなされているか否かを芸術としての一条件として設定したい。私が制作する作品が私の身体の現前/不在にかかわらず、永続的に再生されうるシステムが構築されているか否か。本論は作品におけるこの点を検証する。

第2節 脳死の恒久性

脳死問題を取り上げて美術作品を制作することは、永続的に再生されうるシステムの構築を可能にするだろうか。この問いには大きな課題が含まれている。それは脳死問題の恒久性についてである。日本臓器移植ネットワークの発表によれば、新しい臓器移植法が施行された2010年から脳死判定の家族の承諾による潜在的ドナーが増加し、それに伴って脳死下臓器移植が増加しているという(図7)¹⁴。これは法的な脳死判定が増加し、脳死とされうる者

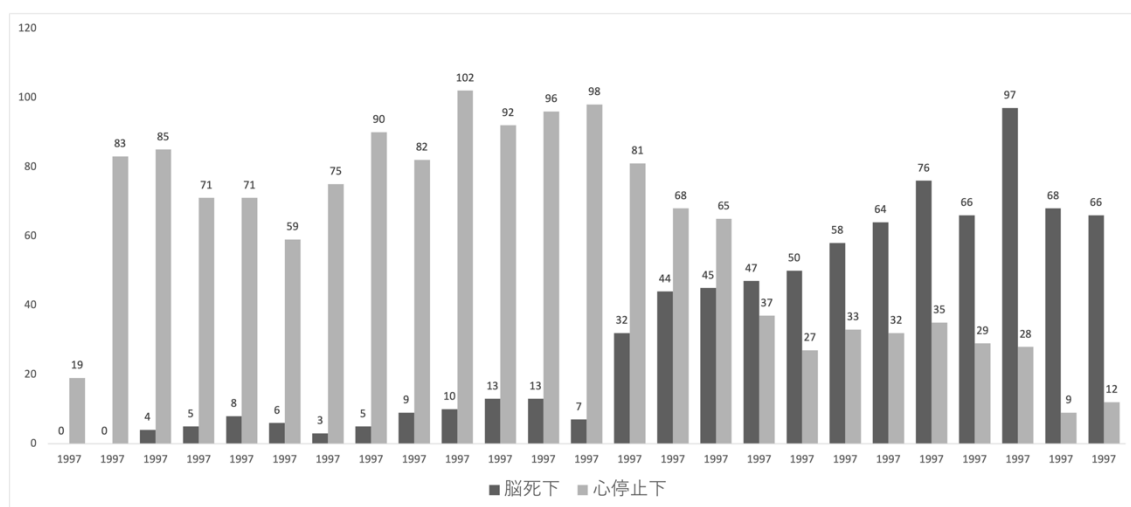


図7 臓器提供件数(1997年10月16日-2021年12月31日) 日本臓器移植ネットワーク提供統計より著者作成

が死者であると判断されている案件が増加しているという事を意味しており、こうしたデータは「脳死＝死」が社会的に多くの人々によって受け入れられ、脳死問題が過渡期である印象を与えるだろう。脳死問題が臓器移植の推進によって将来的に解消されるのであれば、永続的に再生されうるシステムの構築に耐え切れる強度を持ったモチーフとは言い難い。

〈脳死〉と〈死〉との関連が曖昧であり、ただその言語上の符号のみで芸術として語ることができない以上、どのような視点に立ち、脳死を取り扱うかを精査する必要がある。

上記の脳死下臓器提供の増加に関するデータが「脳死＝死」の概念が一般化された結果であるか否か、その是非は2013年、2017年に行われた臓器移植に関する国勢調査との比較で考察が可能である。法改定後に2度行われた「移植資料に関する世論調査」¹⁵の臓器提供に対する意思の項目では家族が脳死状態であり、臓器抵抗の意思表示をしていなかった場合、家族の臓器提供の承諾の是非において「承諾する」が2013年では38.6%、2017年では38.7%となっており、ほぼ横ばいとなっている¹⁶。また日本臓器移植ネットワークの発行する「臓器提供・移植データブック」¹⁷にて全国の臓器提供承諾数と潜在的ドナーとして移植の説明を受けた家族の数を比較すると、多少の誤差はあるが2004年から2016年まで割合の変化はなく、法改正にかかわらず十数年概ね比例しており、説明を受けた家族のうち臓器提供を承諾する家族は約65%に止まっている(図8)。脳死下臓器移植件数が法改定を機に増加す

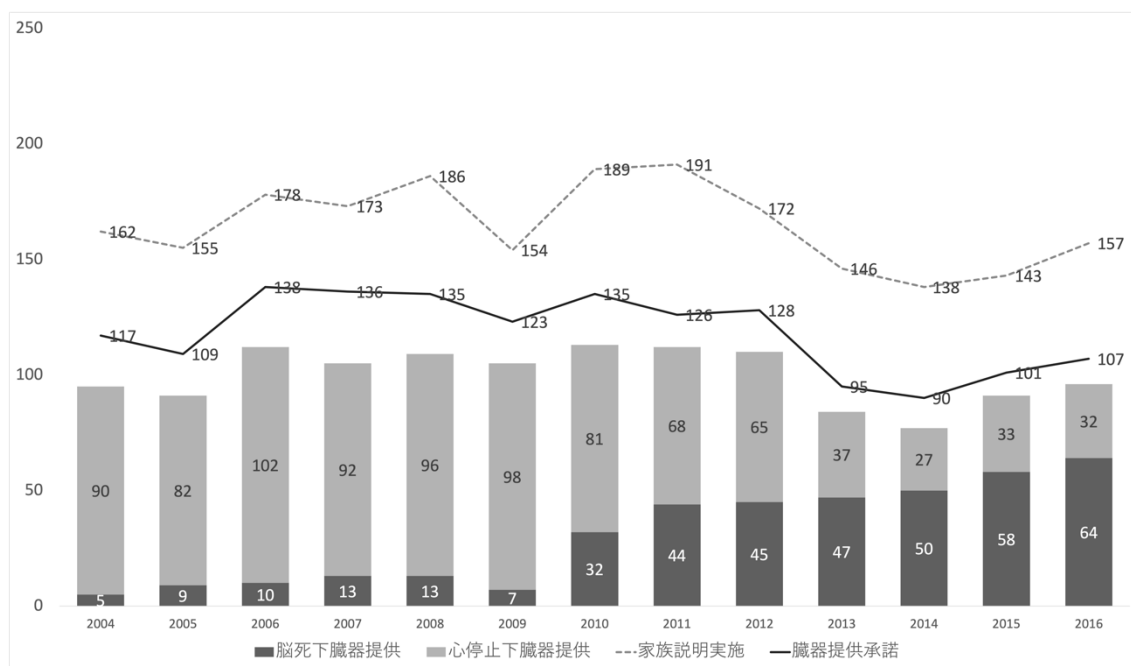


図 8 ドナー承諾数・臓器提供数年次推移 日本臓器移植ネットワーク提供統計より著者作成

る一方で、臓器提供承諾に至る割合が横ばいになる原因は主に二つ可能性があると考えられる。一つは心停止下臓器移植の減少である。(図 8)の通り、改定法が施行された 2010 年に脳死下臓器提供増加と反比例する形で心停止下臓器移植が減少しており、そもそも臓器移植件数自体は変動がない、どこか 1997 年の臓器移植法施行以来 20 年間で臓器提供は減少している。こうした動きには法改正後の移植医療環境の変化が関係していると考えられる。臓器移植は原則として臓器の鮮度が重要であり、死後直ちに移植手術を行う必要がある。心停止下臓器移植の場合、ドナーの情報があり、次第臓器摘出チームが提供施設に派遣されるわけだが、心臓はいつ止まるか、あるいはいつ動き出すか判断し難い非常に曖昧な臓器であり、安定した医療体制を整備すること自体が困難である。それに対し、脳死下臓器提供の場合、脳死判定の手続きを待つ形で新鮮な臓器を摘出することができる為、医療体制が安定しやすい。脳死下臓器提供件数の増加の背景には法改正後、各病院で心停止下臓器摘出の体制から脳死下臓器移植の体制へと医療環境の変化が大きく関係しており、無論これは臓器提供承諾の割合には関係がないのである。二つ目の可能性として、そもそも脳死下臓器提供件数の変動と臓器提供意思の態度には関連がないというものがある。東海大学教授高月義昭が 1997 年に実施したアンケート調査¹⁸⁾によると、調査対象各年代別に「脳死を人の死と認めますか？」と質問したところ、その過半数が「認める」としているものの、そのうちの 5 割が「臓器提供の意思はありますか？」という質問には「提供しない」と答えており、脳死問題と臓器提供は関連がないという見解を示している。自身の臓器提供意思と、家族の臓器提供意思を同様に考えることはできないものの、法改正以前の同調査では家族の臓器移植に関して当人の意思が不明の場合の臓器提供の承諾に関する質問で「同意する」が

35%、「同意しない」が 65%、法改正後の 2017 年の世論調査では「同意する」が 39%、「同意しない」が 49%であり、自身の臓器提供の意思と家族の臓器提供の意思とでは後者の方が「同意しない」と答える傾向は強く、脳死を死と認めない者が自身の臓器提供には同意せず、意思の表示をしていない家族の臓器提供には同意するということは考えにくいので、いずれにせよ「脳死を死と認めるが、臓器提供には同意しない」者の割合は多いことが推測できる。前章で「脳死＝死」という概念は社会通念によって形成されることを前提としてきたが、その社会通念は脳死下臓器移植の現状には左右されないという高月の考察は、ドナ－家族承諾件数の変動の推移と一致している。しかし本当に潜在的ドナ－の家族はこれらの脳死下臓器移植に関する情報に影響されずに、「脳死＝死」の是非が含まれる臓器提供意思の判断を下しているのだろうか。高月は自身の調査の中で臓器提供意思に関する質問では「同意する」「同意しない」の他に「わからない」という回答が多い事についても指摘している。つまり、実際に家族や知人が脳死状態であるか否かによって臓器提供の意識は変動する可能性が示されている。この点については 2000 年に東京学芸大学で行われた和田正人の調査が詳しい。和田は脳死臓器移植への態度とマス・メディア接触の関連についての実証的な研究において、調査方法としてペティとカシオッポ (Petty & Cacioppo, 1986) による「説得に対する態度変容」に関する論理モデル、精緻化見込みモデル (Elaboration Likelihood Model: ELM) を利用した土田昭司 (1989) の研究を紹介しながら、脳死問題への自我関与とマス・メディアや情報への接触度に関する実験を行なっている¹⁹。ELM とは対象者を説得する二通りの手段を表現した理論モデルであり、このモデルでは態度変化を起こすには、説得的メッセージの議論の本質についてよく考えた末に生じる中心的態度変化に至るまでの中心的ルート (central route) と、説得的メッセージの議論の本質についてはあまり考えることなく、議論の本質とは関係ない要因に影響されて生じる周辺の態度変化に至る周辺のルート (peripheral route) を設定する。端的に言えば、人を説得するには、理詰めで説得するパターン (中心的) とそうでないパターン (周辺の) があるという事である。看護学生を対象とし双方のルートでの脳死臓器移植への態度変化を調査したこの研究では、

- ① 問題が自我にとってどの程度重要であるかという自我関与 (ego involvement) が高いと中心ルートに入り、メッセージの内容を慎重に吟味する
- ② 脳死問題への自我関与が高いほど多くのメディア接触を行う
- ③ 脳死臓器移植についてメディアへ注目した者は注目しない者と比べて脳死臓器移植の賛成の態度が大きい
- ④ 脳死臓器移植に反対の説得文を読んだ群は全ての脳死臓器移植の賛成の態度が減少する

などの結果が明らかになっている。これは対象者の脳死問題への自我関与が高ければ高いほどメディアへの接触が増え、脳死下臓器移植への肯定的な情報に接触すればその分、脳死

下臓器移植へ肯定的な態度が増える、ということを意味しており、高月の「脳死問題の議論と臓器提供意思の変化は関連しない」という主張を反証するものである。

厚生労働省により臓器移植を推進している我が国では、医師や脳死コーディネーターによって日本臓器移植ネットワークの統計、新しい臓器移植法が施行された2010年から脳死判定の家族の承諾による潜在的ドナーが増加し、それに伴って脳死下臓器移植が増加しているというデータをもとに、自我関与が最も高い脳死者家族に情報提供されている。前述した通り、この脳死下臓器移植が年々増加しているというデータは、社会通念によって移植は肯定されているわけではなく、法改正と共に変化した医療環境の変化によるものであり、多分に誤謬を招く情報となっていると評価せざるを得ず、逆に脳死状態で長期生存する患者の事例に注目したアラン・シューモン(D. Alan Shewmon)²⁰によって発表された、脳死における心停止への傾向が一時的なものであるという学説に関してはほとんど情報提供されていない。また前述の臓器移植に関する世論調査は2021年に3度目の調査が行われたが、家族が脳死下または心停止下で且つ臓器移植に対する意思表示をしていなかった場合の対応に関しては項目が「承諾」から「負担に感じる」(85.6%)に変更されており、ここでも脳死を死と考えるかというような思弁的問いを避け、臓器提供の意思表示を促す移植を推進させるための実践的なデータに置き換えられている。社会通念によって変動するべきという前提がなされている脳死合意は、移植合意へと変容させる事によって脳死問題の省略がされているだけでなく、誤謬を多分に含む臓器移植の情報提供によって、見た目には国民は脳死に合意しているという印象を作り、この印象は更なる脳死下臓器移植に関する肯定的なデータを製造する構造になっているのである。

本節では第2章と並び、現状の我が国における臓器移植に対して批判的な論を展開してきたが、本論は脳死問題の是非や我が国における医療体制について異論を立てる事を目的とはしていない。また本節で論じている内容はそのほとんどが論理的に理解されておらずとも、それとなく一般に周知されているような事柄かもしれない。本節は移植医療への批判ではなく、脳死問題の恒久性について、つまり「脳死問題はこの先も議論され続けるのか？」という問いに対する回答を厳密にする役割がある。本節の内容を鑑みれば、その問いには否と答えざるを得ないだろう。この先我が国において脳死問題は解決される可能性は少ないが、消滅する可能性は非常に高いと言える。そうであれば、前節、本節冒頭で言及した永続的に再生されうるシステムの構築を可能にするには脳死問題をただ漠然とモチーフにするだけでは事足りないことがわかるだろう。本論が設定している芸術作品がそれ成る条件を満たすためには脳死をまた別の恒久性のあるモチーフへ接続させる必要がある。

-
- ⁹ Hans Belting. 2002 "Bild-Anthropologie: Entwürfe für eine Bildwissenschaft" (仲間裕子訳, 2014 「イメージ人類学」平凡社, pp.188-189)
- ¹⁰ 岡崎乾二郎, 2013 「墓は語るか(墓とは何か)。」『Kenjiro OKAZAKI』2014, BankART1929, p.169
- ¹¹ 保坂健二郎, 2003 「「死よりも生を」と美術館は叫べるか」『美術フォーラム 21』第 8 号, 2003
- ¹² 参照: 「小林正人作家サイト」[<https://masart.jp/worksB1997.html#199312-2002>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ¹³ NHK 「自宅療養中の妊婦 自宅で出産 新生児死亡」(2021 年 8 月 19 日)
[https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/medical/detail/detail_146.html]
(最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ¹⁴ 公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク 「脳死臓器移植の分析データ」(2021 年 12 月 31 日)[<https://www.jotnw.or.jp/data/brain-death-data.php>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ¹⁵ 内閣府 「移植医療に関する世論調査」(2013 年 8 月)(2017 年 8 月)[<https://survey.gov-online.go.jp/h25/h25-zouki/>][<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-ishoku/index.html>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)
- ¹⁶ 臓器移植に関する世論調査は 2021 年度に 3 度目の調査が行われたが、家族が脳死下または心停止下で且つ臓器移植に対する意思表示をしていなかった場合の対応に関しては項目が「承諾」から「負担に感じる」に変更されており、
- ¹⁷ 公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク, 2017 「臓器提供・移植データブック 2017」
- ¹⁸ 高月義照, 1999 「日本人の死生観と臓器移植の倫理」須藤正親・池田良彦・高月義照『なぜ日本では臓器移植がむずかしいのか』東海大学出版会, 1999, pp 216-231
- ¹⁹ 和田正人, 2000 「脳死臓器移植への態度とマス・メディア接触の関連についての実証的研究——精緻下モデルにおける態度変化について——」『東京学芸大学紀要』第 52 集, 2001, pp 317-329
- ²⁰ Shewmon, D.Alan. 1998. "Chronic 'Brain Death': Meta-Analysis and Conceptual Consequences" *Neurology* 53(6): 1538-1545 (小松真理子訳, 2008 「長期にわたる「脳死」——メタ分析と概念的な帰結」『化学』第 78 巻第 8 号, pp.885-899)

第4章 脳死と失踪

第2章と第3章では本論の命題である「脳死は美術作品によって如何に表象可能か」に対して二つの論点、反定立を明らかにした。それは第一に「死を題材としてきた諸美術作品との通時性」であり、第二に「脳死問題の恒久性」である。「死を題材としてきた諸美術作品との通時性」に関しては脳死という言葉は人の死を意味するかという考察を行い、我が国においては法的に、或いは歴史的に「生命喪失」と「機能喪失」の二つの意味が曖昧に存在し、その意味解釈は定かではない事を指摘した。また「脳死問題の恒久性」に関しては我が国において脳死問題が解決される見込みはないものの、消滅する可能性が高い事を指摘し、脳死問題をそのまま描写するだけでは本論が設定する作品が芸術たり得る条件を満たさない事を明らかにした。この二つの反対命題に対応するために、本章では「失踪」という概念を扱う。表現手法として、脳死問題を題材としながら「失踪」というテーマに接続させ、作品「no/w/here/cat」の芸術作品としての通時性と、恒久性を明示する。

第1節 擬制としての脳死と失踪

第2章にて「脳死を題材とした美術作品」が芸術の文脈において通時的な立ち位置を持つことができるか否かは脳死という言葉が「生命の喪失」を意味するか否かに注目したが、それは部分的に正しく、部分的に間違っている。その問いは「機能喪失」であるか否かという問いに変えても同じことが言えるだろう。そこで、脳死は「生命喪失としての死」ではなく「機能喪失としての死」でもない「死のフィクション」として捉えることで、死を題材としてきた諸芸術との通時性を獲得する事を検討したい。第2章第1節で「インターネットにおける脳死(スラング)」と「法律における脳死(病態)」を言語活用法の視点で考察を行い、第2節では歴史的な背景を追うと共に、〈脳死〉は法律上、実践的な臓器移植を推進するための定義に留まっており、個別の脳死者遺族の死生観、あるいは社会通念によって決定されるという前提を確認したが、所謂「脳死問題」で語られる脳死は人の死であるか否かという問いに照らし合わせて考えてみると、その結論として「脳死＝人の死」「脳死＝人の死ではない」のどちらでもなく、「脳死＝人の死のようなもの」という回答が妥当であると考えられる。日本において法律上「脳死」が「脳死は人の死ではないが、脳死者の身体は死体と同じ扱いをする」と定義されていると解釈するのならば、この第六条「移植に関する法律」にはある特定の事実から認められる場合に本質的には性質の異なる他の法律効果と同一の法律効果を認める法技術、「擬制」が施されていると解釈することも可能だろう。法律用語としての擬制は法令上「みなす」という言葉で表現されるため、厳密には異なるが、「臓器移植に関する法律の」「死体(脳死した者の身体も含む)」という記述は「脳死した者を死者と

定義はしないが、その身体を死体とみなす」と読むことは十分に可能である。「みなす」という言葉は用いられていないながらも、脳死を死と宣言せず、その上で死体と同じ扱いをするという事は、たとえば、相続について胎児をすでに生まれたものとみなす事や、電気を財物とみなす事、船舶を強行執行法上不動産とみなす事と同じように、みなし規定の力が働いているとはいえないだろうか。

死の擬制、法律上における死のフィクションに着眼する時、一般的に挙げられるのが「失踪」である。日本の法律では不在者（従来の住所又は居場所を去り、容易に戻る見込みのない者）につき、その生死が7年間明らかでないとき（普通失踪）、又は戦争、船舶の沈没、震災などの死亡の原因となる危難に遭遇し、その危機が去った後その生死が1年間明らかでないとき（危難失踪）は、家庭裁判所は、申し立てにより、失踪宣告をすることができる、としている。失踪宣告とは、生死不明の者に対して、法律上死亡したものとみなす効果を生じさせる制度で、正真正銘死の擬制であり、その他に死のみなし規定を定められたものはない。脳死と失踪は法律上の死の擬制という共通点だけでなく、それぞれが持つ問題系、すなわち遺族の葛藤という点においても類似点が多い。脳死が人の死であるか否かが家族の意思によって決断されることと同じように、失踪宣告では家族という他者が、その生命の所有権、処分権を持つという構造になっている。死んでいるかもしれない、生きているかもしれない、この両方の可能性を残したままにするという事は時として遺された者の生活に大きなストレスや問題を招くこととなる。例えば配偶者が行方不明の場合、失踪宣告をしない限り離婚の手続きが不可能なため、再婚ができないという問題や、遺産相続の手続きができないと言った場合である。遺された者や他者の生（活）を対象者の生より優先させ、法的に死のフィクションを作り上げる事が、脳死判定と失踪宣告にある共通点として挙げられるだろう。

第2節 あいまいな喪失

本節では脳死と失踪の共通点に関して法律における擬制としての類似だけでなくポーリン・ボスの曖昧な喪失理論²¹についても取り上げ、両者に共通する生死が不確定な他者を抱える困難について詳しく検討したい。

「あいまいな喪失」とは在/不在の認知が不確実なものとなる喪失を焦点化するためにボスが提唱した概念である。ボスは「家族問題」研究の主要な動向を形成してきた家族ストレス（family stress）研究を担う重要な論者であり、彼女の研究はベトナム戦争の行方不明兵士の研究から始まり、ニューヨーク世界貿易センタービルテロ事件の被害者家族に対する調査研究や東日本大震災後の日本でも、災害遺族の支援の文脈で注目されている。ボスによれば「あいまいな喪失」には死んでいるか、生きているかどうか不明確であるために、人々が家族成員によって、「身体的には不在であるが、心理的に存在していると認知される場合」

と「人が身体的に存在しているが、心理的に不在であると認知される場合」の二つのタイプが存在しているという。前者の喪失は自然災害における行方不明、人質・拘禁、移民、養子縁組、離婚、転勤、成人子の離家、高齢者の老人ホームへの入所などが挙げられ、後者の喪失はアルツハイマー病やその他の痴呆、慢性精神病、脳挫傷、脳梗塞、アディクション、移民、仕事への過度のコミットメントなどが生じうる状況として挙げられている。「あいまいな喪失」は次のような過程で経験される。まず、喪失が最終的なものであるのか、一時的なものであるのかわからないので、当惑させられ、問題を解決する事ができなくなる。次に、不確実性によって、愛する人との関係を再編成し、喪失の曖昧性に順応する事が阻止されてしまうため、家族関係が喪失以前のままで凍結する。人々は、失踪以前の状態に元通りになれるという希望に囚われてしまう。さらに葬儀のような喪の過程を支援する象徴的儀式が行われなため、彼/彼女の経験が周囲のコミュニティにとって証明されないままになる。このように「あいまいな喪失」は長期にわたって存続するものであるので、人々はあいまいな喪失によるストレスを抱え続けることになるという。家族や愛する者の喪失にある構造を分析したボスのこの理論は、グリーフケアに運用されることを主な目的としているが、最も留意すべき事は、いずれのタイプの喪失も、戦争や災害といったような予期しない破局的な状況だけではなく、より日常のありふれた状況においても生じるとし、あらゆる事例の中に原理を見出した点にあるだろう。そして私は「脳死」という状況はこの「あいまいな喪失」における第2のタイプ、身体的に存在しているが心理的に不在である状態に該当すると考える。実際にボスが研究対象としている脳挫傷や脳梗塞などを原疾患とする脳の障害が招く人格の喪失というパターンは脳死状態の状況と酷似しており、その喪失が最終的なものであるか、その喪失の経験者である家族が恣意的に判断するという点、「明瞭な喪失」に結実されないという点において、ボスの理論は脳死現象を十分に捉える事ができる。ボスはこの喪失を体験する家族にとって最も根本的なケアとしてその喪失の「明瞭化」が重要であると主張するが、我が国における臓器移植推進、医療コーディネーターによる説得はその「明瞭化」を促すグリーフケアとなっていると言えるのかもしれない。本論の趣旨とは多少違える主張ではあるが、脳死問題の消滅はある種遺族に対するケアの観点で必要とされているという事も書き記しておこう。

第3節 失踪の恒久性

前節では本論における反定立「死を題材とした諸美術との通時性」に対して、生命の喪失としては取り扱えないものの、死のフィクションとしては取り扱う事が可能である、という回答を用意し、また死のフィクションとして多くの共通点を持つ〈失踪〉という概念を取り上げた。本節では次に脳死の恒久性に関する総合命題として〈失踪〉という概念がどのように

援用可能かについて考察していきたい。脳死問題は解決される見込みはないものの、消滅する可能性がある。自作『no/w/here/cat』が脳死問題を題材としながら、〈失踪〉という主題を取り扱う事で「持続する経験の実現」を獲得する事を主張するためには、〈失踪〉という現象が恒久的なものであるということについて説明する必要がある。なぜなら失踪現象は脳死現象と同じく、現在あるいはある特定の期間において生じている現代社会に特有な暫時的現象であるという印象が存在している可能性があるからである。そしてその印象が存在する最も大きな原因は2011年の東日本大震災の影響によるものであろう。まずはその点について確認するために警察庁が発行する全国の行方不明者の状況(図9)²²に関するデータを傍観する。

警察庁は行方不明届の受理状況報告書にて10数年間、2020年に著しい減少はあるものの、

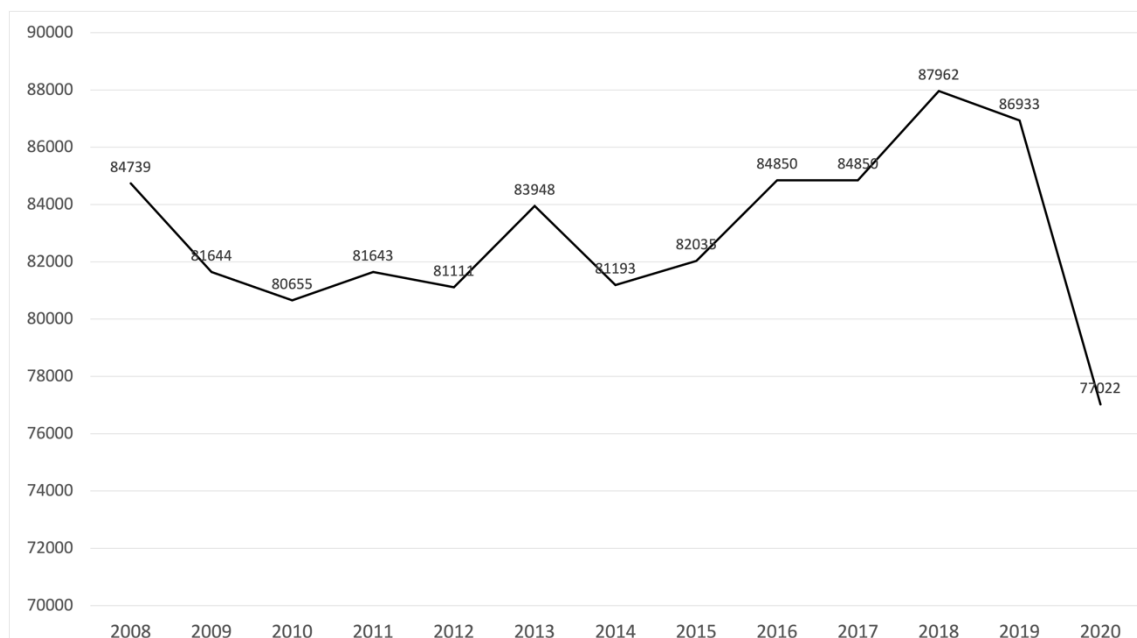


図9 行方不明者数推移 警察庁統計より著者作成

行方不明者がほぼ横ばいになっていることを報告しており、震災直後とされる2011年、2012年に至っては、それ以前や現在の状況では行方不明の原因や動機の内訳は異なるものの、全体的に減少傾向にある。データ上このような結果になるのは失踪現象、「人が家族や集団から消え去る現象」の性質に関係がある。『失踪の社会学』[2017]²³で中森弘樹は失踪研究における対象に関して

ある現象が失踪であるとみなされるためには、遺された者たちの消失に関する認知——「人が消え去った」あるいは「突然いなくなってしまった」「突然連絡がつかなくなった」などの出来事に対する認知——が伴っていなければならない(中森, 2017)

と言及している。これは失踪現象をその他の類似する現象（家出、行方不明など）と差別化し、より厳密に捉えるため設定した、失踪の最も特徴的な条件である。例えばある者が家族から離れ、友人の元で生活をしていた場合、その家族からみればその者は失踪したと言えるが、友人から見れば失踪していないという事例のように、失踪とは対象者個人が独断で行う行為ではなく、遺されたものとの関係の中で生じる現象なのであって、発生には対象者の身体の所在や状態には関係がない。そしてこの観測者の態度によって状況が変化するという失踪の性質は統計的な情報による実態の把握そのものを拒むのである。東日本大震災の直後である2011年に行方不明者届受理件数が減少傾向にある原因にはあらゆる可能性が考えられるだろう、行方不明者の家族が死亡している場合、行方不明者の死が親密な関係の者にとって蓋然的であると判断される場合など。極論、失踪者の数は、失踪者を探す者の数と比例し、潜在的な行方不明者との関わりはなく、故にデータ上でも、あるいはそのデータを利用せずしても、失踪は現代社会に特有な現象ではないという事が言える。また失踪が恒久的な現象であることの裏付けとして、日本では「神隠し」という考え方も古くから存在する。多くの「神隠し」²⁴伝承を整理し、民俗学的な観点からその特徴と背景を導き出した小松和彦[2002]の研究を以下に参照する

失踪事件が発生する。「神隠しかもしれない」と人々は、鉦や太鼓で探し回ったが見つからない。数日後に、失踪者が死体となって山中で発見される。人々は死体の状態などに「不思議」を見つけ出し、やはり「神隠しにあったのだ」と判断する。そうすることで失踪者は、民族社会の“向う側”、神の世界へ旅立った者、つまり社会的に死んだ者として処理されるのである。この失踪者の死の真相が、事故死であれ、自殺であれ、また殺人であれ、「神隠し」というラベルを貼る事で、全てが不問に付されて、失踪者＝死者は“向う側”に送り出されることになる。たとえ真相を知る人がいたとしても、そうしたラベル貼りを認めることで、真相もヴェールに包まれてしまうわけである。（小松,2002）

以下の小松の説明によれば、「神隠し」という物語には、不可思議な事件にあった者が「向う側」の世界へと送り出されたと解釈させることで、その事件に対する人々の真相の追求や疑問、感情などを終わらせる機能があったという。失踪すること、親密な者や人間関係から逸脱し「無縁」となることは、現代においては「無縁仏」のように望ましくないと考えられているが、そうした感覚は必ずしも歴史的に不変であったというわけではない。中世の日本社会には「無縁所」と呼ばれる寺院が全国各地に存在し、この寺院に入ると世俗との縁＝関係性が切れ、婚姻関係や賃借関係が断ち切られたのだという。「神隠し」という解釈がどれほどの頻度で失踪事件に対して付与されていたのかを、現代において確認することは困難

であるが、「神隠し」という解釈が知覚不能な人の「喪失の完了」を、遺された者たち、失踪者の遺族たちに与えていたのであれば、「神隠し」という物語の結末は「あいまいな喪失」における遺族のストレスを回避するために多分に機能していたであろうことが容易に想像できる。失踪は現代における特有の社会問題ではなく、むしろ「あいまいな喪失」理論が指摘する、「喪失の完了」をめぐる恒久的な営みとして存在しており、脳死における遺族の問題系と合致するのである。

²¹ Boss, P. 1999. “Ambiguous loss: Learning to live with unresolved grief.” Cambridge, MA: Harvard University Press. (「「さよなら」のない別れ、別れのない「さよなら」」 南山浩二訳, 学文社)

²² 警察庁「令和2年中における行方不明者の状況」2020
[<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/yukue.html>] (最終閲覧日 2022年3月30日)

²³ 中森弘樹, 2017「失踪の社会学——親密性と責任をめぐる試論」慶応義塾大学出版会株式会社

²⁴ 小松和彦, 2002「神隠しと日本人」角川書店

第5章No/w/here/cat ——そこにいる（いない）猫

本論では〈脳死〉を題材とした作品を制作するにあたり、脳死問題をめぐる状況をただ漠然と描写するのではなく、〈失踪〉という題材と共に表現することで、「持続的な感覚を実現する強度」を付与し、「死のフィクション」を二重に表現する必要性を論じた。このような問題意識の中で制作した作品が『No/w/here/cat』である。本章では本作の詳細と制作過程を説明するものである。

第1節 死の認知不可能性

本作の構成は主として二つのテキスト、ある事象に対する二つの視点を同時にインストールするものである。以下にそのテキストを参照する。

①

ふたりの家族を失って、もう10年も経つ。彼と出会った時、僕は中学生で、彼はまだ生まれて間もない仔猫であった。車の行き交う道路にぽつんと横たわり、しなしになになった身体にはノミがたくさん住んでいて、薄汚れ、コバエも集まり出していたが、痛々しいメヤニの奥の瞳はぎらりと光っており、僕はすごく綺麗だと思った。元気になったら野に返すという条件の元うちで預かることになり、それから5年くらい生活を共にしたが、ある日突然いなくなってしまった。母は「あの仔はもう死んだの」と言っていたけれど、僕はどうしても気持ちの整理をつけられず、家の周りで彼の鳴き真似をしながら彼のことを探した。毎日そんな生活を繰り返していたら、ある日僕の彼の鳴き真似を聞いて家にいた母が外に飛び出してきた事があった。声の主が僕だとわかり、とても残念そうな顔をした。母のそんな表情をわたしはもう見たくないと思い、それから僕は彼を探すことをやめた。

その数年後、父がとある事件に巻き込まれ、新宿の病院に入院した。致命的な打撃が幾度となく彼の頭を襲ったせいで、脳の機能が不可逆的に停止しているとのことだった。脳が不可逆的に？よくわからない顔のわたしに、医師は「これは死んでいると同じ状態だ」と丁寧に説明し、父に繋がる心肺蘇生機器の停止の決断を僕と母に迫った。僕たちが蘇生の停止を申し出ると、父はすぐに死んだ。僕の判断によって死んだのだから、父を殺したのは僕かもしれない。

“切迫脳死”の判定が下されてから心停止するまでの間、父は本当に死んでいたのだろうか。医学的にも法的にもまだ人類はその答えを出せずにいる。生きているか、死んでいるか、どちらかではなく、そのどちらでもある/ない命を目の前に、確かに脈打つ父の身体を前に、僕は失踪した彼のことを思い出していた。父と同じように、あの仔の命も

未だに完了していない。

②

その少年を見つけた時、わたしは逸れてしまった母を探すために、三日三晩、心当たりを彷徨い歩き、朝方、体を休めるため、自動車道の縁石に寄りかかっていたところだった。先ほど不意に軽自動車と衝突した際、いくつかの擦り傷を作ってしまい、痛みは体の芯までじんじんと響いていたが、耐え難い空腹が頭から指の先まで駆け巡り、この苦痛一つ一つがいずれのものであるか、いまひとつ判断をつけられずにいた。少年に声をかけると、彼は行き交う自動車を両手を振って静止し、わたしのもとへ駆け寄ってきた。そして、買って間もない学生服の袖の余りをゆらゆら揺らしながら、わたしを抱え、わたしを見つめた。彼の住処には三人の子供と二人の大人を差し引いても余りある食料に恵まれており、私が声をかけると彼らはその度に余った食事を私に差し出した。食料の良い見つけ方をわたしはまだ母に教えてもらっていなかったから、この先どうしようかと途方に暮れていたのも、これを幸いと思い、わたしは少しの間この家族を所有することに決めた。太陽が昇って明るくなれば、母を探しに街へ帰り、日が沈んで空腹になると、少年のところへ行き、食事と暖をとった。少年たちは身に纏う服の他に、体よりひとまわり大きな布団をいくつも持っており、互いに体を寄せ合ってその布を纏った時の暖かさは、まるで五月の日差しのようにであった。このような暮らしを五年ほど繰り返した晩夏の日の暮れ、多摩川の土手でようやく母を見つける事ができ、わたしはやっと家族のもとへ帰る事ができたが、あの場所に残した少年のことが心配で、時々住処から様子を伺っていた。ある日少年の父親が私たちの住処へやってきた。彼はまだ息をしていた。血が巡り、体を寄せると懐かしい温かみを感じた。彼らの話によると、人は“生きている”ことが何よりも重要であって、その為になら何でも犠牲にできる習性を持っていて、だから“生きていない”ということに関する形式にひどく執着していたが、そのくせ“死んでいる”ということについては、あまりよく理解していないようだった。私たちからすれば、そんなことよりも、より優先すべきことが、世界にはあると思うのだが、少年の動揺する姿を見ると、なぜだかわたしも胸が締め付けられた。少年の父親は脳の機能が完全に停止していた。彼らは“生きている”ことに依存し、肝臓、心臓、肺、腎臓、胃、小腸、大腸、胆嚢、脳、副腎、脾臓、そしてそれらを繋ぐ細かな神経の機能停止を何よりも恐れていた。その恐怖を回避するために、知恵と技を磨き、ついには体の組織を互いに交換する技術を取得したが、その上で、彼らは他者の体を所有することについて躊躇していた。彼らが自らの土地や物の所有をめぐって立ち上げた所有権のルールは、人体、あるいは生命の所有に適用できるほど柔軟ではなかった。他者の体を所有するということは逆に、自らの体を所有していないということを意味し、それは、

労働を基軸とした彼らの社会の根底を崩す物であった。少年は動揺していた。父親の命の所有権を、処分権を突然与えられ、それでいて、彼自身は何も失っていないことに動揺していた。本当の意味で悲しめない自分を、心底悲しんでいた。私を見失った時と同じ表情であった。人間は幸か不幸か新しい思想を作りあげたり、今まで大事にしてきたものをすっかり忘れる事ができる。わたしたちのように生とか死とか、そういう事が彼らにとってどうでも良くなる日が来るのはまだまだ先だろうし、少年には永遠にも思える厳しい現実が絶望的に続くだろうが、人は臓器移植、再生医療、遺伝子治療、出生前診断、中絶手術、安楽死——それらの局面で命の所有に戸惑いながら、それでも忘却の果てに、生き遺る事、死なない事、以上に大切なものを目の前にして、新しい行動ができるようになるはずだ。少年が私を拾い上げた時と同じように。彼も遠くない未来、いずれここに来ることになるだろう。その時までもう少し私は、ここで彼のことを見守ることにする。

これらのテキストはある二つの出来事、少年が野良猫を拾い、そして逃げ出したことと、その数年後、少年の父親が切迫脳死状態に陥り、少年が父親の心肺蘇生の停止を申し出た事を、①では少年の視点で、②では猫の視点で書き記した物である。①は文字で表現され、②は映



図 10 2020 『No/w/here/cat』

像と共に音声で再生される。①は実際の出来事を偽りなく描いた実話であり、②は本来応答する事ができない者の情景を描いたフィクションである。こうした実話と虚構による二つの視点を利用することによって強調している事は失踪、あるいは死の「知覚不可能性」であ

る。前章で述べたように、失踪という現象は呼びかける者と、応答しない者との関係の中で生じるものであり、失踪者の実態を把握した時、それは失踪現象ということとはできない。より失踪に接近し、不在というブラックボックスを厳密に描くためには、そこに虚構を設定する他に術はないであろう。また本作ではその虚構にある虚構性自体を明示するために、遺された者の視点を並列させることで、死のフィクションそのものを高次的に描く事を目指した。脳死や失踪という現象に限りなく接近するためには虚構という認知効果を利用する必要があるという、作者の意識が強く反映された表現手法である。逆に、失踪の実態を描写するという行為は失踪に対する社会的アプローチ、言説分析、統計分析などでは限界があるとも言えるだろう。実際、前章で言及した『失踪の社会学』での中森の失踪研究では、研究方法として、失踪者の家族へのインタビューと共に、それと対応させる形で失踪経験者へのインタビューも行なっているが、中森本人によってこのような社会科学研究には調査者の立場性に関して多く問題がある事を指摘している。

言うまでもなく、古典的な自然科学において想定されていたような、無色透明な観測者という前提を、社会科学においてそのまま採用することは不可能である。社会現象を観測する際には、観察者本人も何らかのかたちで特定の社会に所属しているわけであるから、その社会の価値観とは無関係に現象を見ることはできない。社会学者もまた、すべての価値に中立的であることはできないのだ。〈中略〉仮に筆者が研究者として価値中立的でありえたとしても、調査者としてインフォーマントと向き合う際に、インフォーマントにとって筆者がどのような立ち位置に映るかは、また別の問題であろう。

〈中略〉調査者がインフォーマントにとってどのように映るかに応じて、インフォーマントが調査者に対して何を語るのかも、変わってくると考えるのが自然であろう。(中森, 2017)

失踪研究には、研究対象である失踪者の実態に迫れば迫るほど、その性質上、本質から遠ざかってしまうという、ある種のパラドックスが存在している。それは脳死現象や死においても同じである。調査者がある社会に所属し、存在している限り、その実態を観測することはできない。まさに“死ぬのはいつも他人ばかり”である。むしろその矛盾の存在を明示してこそ、失踪や脳死をめぐる在/不在に対して厳格にアプローチする事ができるのである。

筆者のこのような仕掛けの発案には安部公房の失踪三部作、特に物語の締めくくりに主人公の失踪申告書類を添付した『砂の女』²⁵が影響している。これらの小説は今日における生のありようと、主体性の獲得（あるいは喪失）を描くものとして、あるいは、作者自身が「一応三部作という形で、失踪前駆症状にある現代を書いてみました」²⁶と言及するように「失踪」が単なる事件ではなく、社会構造の算出する症候群であるという、物語と現代社会を対

照化する意味での視点で評価されることの多い作品であるが、別の評価点として、失踪をめぐる主人公の立場をそれぞれの小説で違えるという作劇の秀逸さが挙げられるだろう。安部公房による失踪三部作での主人公たちは、いずれも何らかの形で失踪現象を体現しており、端的な原理を取り出すことはできないが、『砂の女』では失踪の物語を失踪者の視点で描き、『燃えつきた地図』では失踪者を追う者が主人公となり、対照的な観点で物語が描かれるという、失踪を体験する立場を入れ替えるという基本構造がある。失踪者の実態とその描写の不可能性を双方の物語で補完することにより、失踪現象に対してフィクションのみが許された接近を可能としているのである。自作『n/w/here/cat』はこうした、ある現象を一方ではノンフィクション、他方ではフィクションという二点観測のみが許された死への接近を試みている。

第2節 現代社会における暴力の不可視性——トンネル

また本作の中で重要なモチーフになっているのは脳死者から伸びる大量のチューブである。集中治療室にて治療を受ける患者の状態を医療業界ではしばしば「スパゲティ状態」と呼ぶことがある。これは患者があらゆる生命維持や治療のための器具に繋がれ、患者の身体が行き先不明の管に囲まれた姿を形容した呼び名である。私が実際に父の死に際で目の当たりにした姿であり、おそらく現代人のほとんどの死に際で見ることができる光景であろう。この「スパゲティ状態」というのは患者の身体を外部化し、身体を曖昧にする現代の医療状況、現代の死を象徴する姿であり、臓器移植という身体の外部化が重要な課題である脳死現象を過不足なく体現するモチーフであると私は考える。出口と入口は明白であるにもかかわらず、その経路が複雑化することによって知覚困難性、曖昧性が生まれると言うことは自作「トンネル」の制作で言及した。本節ではこの作品について簡単に触れておく。

普段意識しにくいことではあるが、今日私たちの生活の中で一日に一度は触れ、操作するスマートフォンは驚くほど細かな部品によって構築されており、そしてそれらの部品たちはあらゆる鉱物から組織されている。ニッケル、ネオジウム、クロム、チタンなどなど。蒸気した鉱物はいわゆるレアメタルと呼ばれるもので、その名の通り世界の限られた場所で採取される金属である。レアメタルはスマートフォンに限らず自動車、家電4品目など、私たちの身の回りの製品に多く使用されており、もはやレアメタル無しに現代社会は成り立たないと断言して良いだろう。中でも電子機器全般に組み込まれているタンタルは、他の鉱物と比べてより小型のコンデンサーを作り出すことができるが故に世界の産業において極め

て重要な役割を果たしている。

タンタルは紛争鉱物である。90 年代から 20 年以上にわたって紛争が続いているコンゴ民主共和国（以下コンゴ）では、武装勢力によって不法に採掘された鉱物タンタルが武器購入や戦闘維持のための資金源となり、紛争を一層長期化させる状況を招いていることからこのように呼ばれる。この問題を受けて 2010 年、米国政府は米国での上場企業に対して製品に使用されている部品一つ一つの生産地、流通経路（サプライチェーン）の情報開示することを義務付ける法律を成立させるが、10 年以上経過した今日でも状況は好転していない。

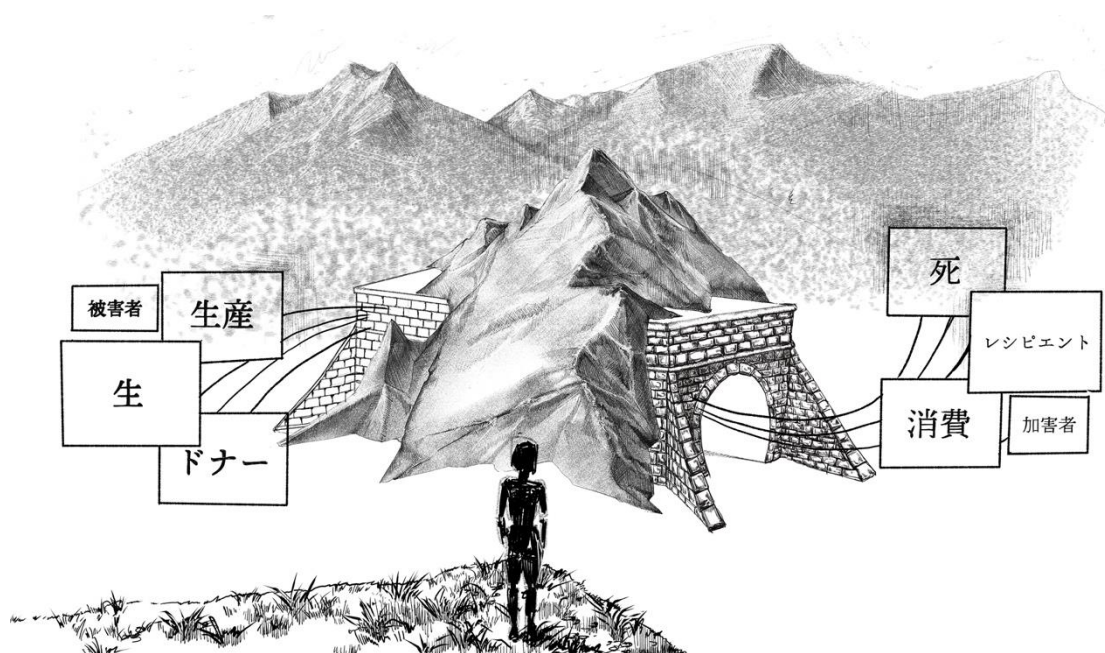


図 11 『トンネルのためのドローイング』

紛争が終わっていないという意味ではない。そもそもサプライチェーンの情報開示自体ができていないのだ。農産物や種工芸品とは違い、鉱物資源や工業製品のように加工度が高く、複雑な生産・流通経路をもつ産物はその道筋を辿ることが非常に困難で、米国における上場企業で最も成果を上げているアップル社でさえ、明らかになっているサプライチェーンは約 8 割。残りの 2 割はどこから来ているのかよくわかっていない。国際的な消費者倫理の観点から言ってこれはつまり、私たちが何気なくスマートフォンを購入することが紛争の手助けになっている？かも？どうなの？？ということだ。

複雑さは近くの可能性を生む。入口（生産地）と出口（消費者）が明白であるのに関わらずその道筋が不可視化されている現象を「トンネル」という概念で捉えてみる。

今後における搾取の歴史は 19 世紀末にヨーロッパ人が到来したことにより始まり、時代によって支配者を変えながら、象牙、ゴム、労働、女性、そして数え切れないほどの人命を奪い続けてきた。独立後も今後は不安定な国政から内戦に突入、今日の紛争はその結実と言え

る。本来天然資源に恵まれた富める国であるはずだったコンゴの人間開発指数（HDI）は世界において最下位である²⁷。現在も国連が平和維持活動として武力介入していることから考えても、欧米諸国は植民地時代からコンゴとの直接的関係が非常に深いということがわかる。こうした背景からメディアや民衆のアフリカに対する関心は強く、NGOの働きもあって、先進国としての倫理観が形成され——というのが米国がサプライチェーンの情報開示を義務付ける金融規制法（ドット・フランク法）に踏み切るまでの流れである。一方日本の企業はどうか。日本は世界でも有数の資源消費国であるが、米国のような法律は存在しない。が、実は米国で規制が始まった2010年から日本の企業もサプライチェーンの開示を急速に進めている。2000年末からタンタルの価格が高騰した原因として新世代携帯電話や、ソニーの「プレイステーション2」の販売が関係しているという国際NGOによる指摘があったことも原因の一つだが、実情は各企業が顧客企業からの問い合わせに対応した結果、つまりグローバル企業としてのブランディングの為に自主規制を行なっていると言う格好だ。この過程において重要なことは、米国のように世論から、消費者の倫理観から規制が生まれたのでは無いという点である。事実今本論を読んでいる読者の中で、紛争鉱物の存在を知っている者はどれだけいるのだろうか。アフリカとの直接的関係が弱い日本ではメディアがその問題を取り上げる機会は非常に少なく、そもそも問題に関して触れることはあまり無い。途方もなく複雑化したトンネルを経由し、私やあなたはポストコロニアルの構造的暴力にいつの間にか組み込まれつつ、そしていつのまにか理解不能な倫理観によってある程度健康にさせられた商品に囲まれているのである。私は今、私やあなたがたった今も懷に忍ばせているそれは、私たちの暴力であり、そうでは無いという事実が重なり合っている、ということの説明した。しかしあなたはこの事実を知ったところで、電子機器に対する消費行動を変えようなどと考えることは無いだろう。そもそも私はやあなたはこの構造的な支配について、コンゴの国民が、子供が、女性が流す血や涙について何を思うことができるのだろうか。説教のように聞こえるかもしれない——そうではない。そんなこと、この私ができるはずなどない。世界が抱えている社会問題の中でもこの件に限っては何を感じるか、ということよりも私たちは今“何を感じていないのか”ということの方がよほど重要なのである。ここにトンネルが存在している。

本作は以下のようなプロセスで制作された。

- ① まず私がコンゴにおける紛争鉱物の問題を取り扱ったドキュメンタリーを見る
- ② ドキュメンタリーを見ながら私は涙を流す。私は涙を流す方法をいくらでも知っている
- ③ ②で流した涙を飽和した食塩水に混ぜ、事前に製作した塩の結晶を食塩水に投入し、結晶を大きくする
- ④ ある程度大きくしたら研磨等加工し、ネックレスを制作する
- ⑤ 制作したネックレスと製造過程の映像アーカイブを展示する

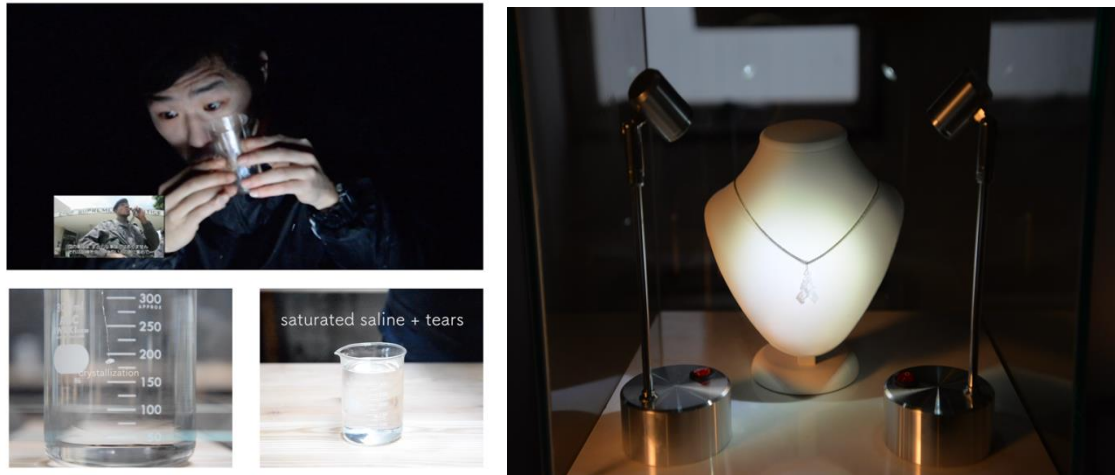


図 12 『トンネル』映像インスタレーション

涙に含まれる塩化ナトリウムの量と結晶の造形は涙を流す時のストレスによって大きく異なり、感情によって変化するという。この作品（図 12）では鉱物がサプライチェーンというトンネルを通過しメディアとなり、メディアから私の身体というトンネルを通過し、また石になる。こうして再制作された石は私の想い（ストレス）に由来しているかもしれないし、そうでも無いかもしれない。紛争鉱物という社会問題を知った後に私たちがスマートフォンから感じない何かを、涙の結晶からも感じさせない。感じるべきであるはずなのに感じる事の出来ない現代人の不感症をオブジェクト化した。

この作品の制作の中で見出した「トンネル」と言う構造が脳死現象に援用可能なのであれば、トンネルの入り口は生であり、出口は死であり、そして現代の科学技術と並走する倫理観によって内部が不可視化されたトンネルが脳死であり、失踪であるということが言えるだろう。あるいは、脳死現象とは誰しにも必ず訪れる生と死が重なり合った状態であるトンネルの視覚化を意味しているとも言えるかもしれない。私の父はこのトンネルを通過した。脳死者遺族が体験する虚無とはこのトンネルを延々と眺めることなのである。

²⁵ 安部公房, 1962 「砂の女」 新潮社

²⁶ 安部公房・秋山駿「私の文学を語る」三田文学編集部編『三田文学』三田文学会, 1968, pp5-20

²⁷ 国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所「人間開発報告書 2011」(2011 年 11 月 2 日)[https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/presscenter/pressreleases/2011/11/2/release_20111102_2.html] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)

おわりに

私がモチーフにする事柄にはある共通点がある。それはモチーフの「あいまい」さであり「あいまい」という言葉そのものである。それは例えば、脳死問題によって明らかになった死の曖昧さであり、消費者と生産者との間に結ばれる関係の曖昧さであり、不可視な暴力にある被害者と加害者の曖昧さである。こうしたモチーフをただ呆然と、ニヒルに眺めるだけではなく、「あいまい」と言語化し、意識化する事で制作を試みてきた。私はこの曖昧さにある曖昧さそのものを明確にする制作様式を「曖昧さ回避」²⁸と呼んでいる。曖昧さ回避という言葉はウィキペディア英語版の「disambiguation」の訳語で、「曖昧な」を意味する「ambiguous」から形容詞の語尾につく「-ous」を取り除いて、打ち消しの意味をもつ「dis」と動詞化する「-ate」をくっつけた「disambiguate」を名詞化して「～ すること」とした語である(ゲーム理論における曖昧さ回避行動とはまた違う概念であるという曖昧さ回避を忘れる私ではない)。対義語である unambiguous とはまた違う、独特なニュアンスを持った言葉である。ある本質に向き合おうとする際、そしてその本質が物理的に観察不可能である時、そのものが何であるかを記述するにはそうではない物を記述すればよい、というアイデアを元としていて、赤瀬川原平の『模型千円札』²⁹からヒントを得ている。

日常性の中に潜伏している不特定多数のオブジェ、たとえば世界中の椅子を隔離・隠蔽すると、椅子に繋がる机、あるいは椅子にピッタリ坐っていた人間は、中腰で机に向かい、立って食事をするために机の足を継ぎ足し、ねころんで仕事をするために机の足を切断し、あるいはまた、電車の中ではつり革が殖え、床屋の主人に踏台が必要となり、人間の足は太くなり、映画館にはてすりが殖え、イヨネスコの戯曲がひとつ減り、そこまで連続してきた世界の約束は攪乱され、人間の運動と机の変貌によって、椅子の原理が総体的に望遠されると同時に、椅子に連なる、椅子を規制していた世界の体系を、いやおうなしに観察することになる。

逆にいえば、人間を含んだ、世界を観察する場合、任意のものを一種類、隔離・隠蔽すればいいことになる。(赤瀬川, 1964)

赤瀬川は作品を用いて資本主義を観察するために千円札を本物と偽物と模型の3つに区分し、貨幣の流通性を隠蔽した模型を上記のような科学性に富んだ論理で制作した。(赤瀬川は「本物」と書かれた偽物の千円札も数多く制作している) そのものの本質を捉えるために、そうではない物(模型)を表象する制作論をより現代的に解釈したものが私の用いる「曖昧さ回避」という言葉であって、ウィキペディアの用語から引用する事でインターネットやデジ

タルデバイスを利用した、という意味合いを含意させている。またこの言葉の優れている所は“unambiguous”でも“disambivalence”でもない、ウィキペディア特有の造語であるという点である。美術評論家の榎木野衣は『日本・現代・美術』³⁰のなかで小説家の大江健三郎のノーベル賞受賞記念講演『あいまいな日本の私』を取り上げながら、下記のような曖昧さの概念の分析を行なっている。

単純化していえば、「アムビギュアス」の「あいまい」さが〈A かつ 非 A〉に由来し、それゆえに優柔不断ともいわれかねないのに対して、「アムビヴァレント」の「あいまい」さがもつのは、〈A あるいは 非 A〉と要約できる。すなわち、「アムビヴァレント」であることの「あいまい」は、A と 非 A の中間状態に発生する「アムビギュアス」な「あいまい」ではなく、A か 非 A かのいずれを選ばなければならない心の葛藤から派生する両極間の振幅から生み出される「あいまい」だということである。

榎木は近代化以降の日本の文化の様相を「あいまい」と述べた大江健三郎の言葉を受け、現代においては大江がさす日本の「いまここ」より「美」から程遠い事を指摘し、分裂症という病態を意味する「スキゾフレニック」という言葉で言い換え「スキゾフレニックな日本の私」という概念について言及している。「西洋」か「日本」か、「理性」か「感性」か、「理論」か「実践」か、「左翼」か「右翼」かという排他的な二者択一の認識、「アムビヴァレント」なパースペクティブで文化が語られる事への批判として十分機能するものであり、たしかに例えば 90 年代に活躍した代表的な作家である村上隆の作品はオタクと美術、商品とアートといった二項対立のなかで揺れ動く、どこか病的な造形をしていて、それが人工的な近代化を経た日本の現代を表象している言説には説得力があるだろう。

この榎木の批評を背景に「あいまいさ回避 (disambiguation)」という語は「あいまい」に含まれる意味のズレを整理し、その上でそうした「あいまい」さからの逸脱、ひいては、90 年代に行われた批評からの逸脱を狙うために私が用意した論理であった。しかし、私が取り上げるモチーフの「あいまい」さは実践では「あいまい」なまま描写される事が多く、私自身「あいまい」さからの逸脱を避けているようにも思える。曖昧な事柄から逸脱するということは本論第 4 章で取り上げた、「あいまいな喪失」の理論に則って考えてみても、ブリーフケアとして、本論でいうと私自身の健康改善のために重要な物であるが、私にとって制作とはそのような効果を狙っているわけではなく、むしろ美術作品にすることによって私の経験は私にとっての呪いと化しているといっても過言ではないだろう。曖昧さ (アムビギュアス) を回避するということは具体的には、父や猫の生死や事件の真相、社会問題の是非についてどちらか立場を取る、という事を意味し、そうしたことは私自身、そして現代の美術界も求めてはいない。そしてなにより本節が取り上げている、ある特定の社会状況をモチーフ

にした際に生まれる表現者の加害性から逃れる事はできない。やはり、私が本論で示すアーティストとしての立場は樁木の分析から成長のない、スキゾフレニックな現状を生きるしかないのであろうか。

それにしても、と思う。スキゾフレニックという統合失調症という病態から由来する比喻を、ここまで散々「脳死」という病態を厳密に分析してきた私がなんの躊躇もなく受け入れて良いものだろうか。

そこで私はここで改めて「曖昧さ回避」、そして「スキゾフレニック」という概念からさらなる言い換えとして「オキシモロン」という語の活用について検討してみる。

オキシモロン(oxymoron)とは意味の矛盾する語句を並べて、言い回しに効果を与える修辞法である。日本語では撞着語法と訳され、ギリシア語の oxys(鋭い)と mōros(愚かな)を合成した語で、例えば「ゆっくり急げ」のような語法である。オキシモロンの優れた点は幾つかあり、一つは二つの語が同時に存在していながら、それでいて二者択一の確率論的印象を与えないという点である。「アムビヴァレント」のように二つの概念が別個体として同時的に存在している、にもかかわらずそれらは切り離される事なく、一つの文として密接につながっている。「ゆっくり急げ」と誰かに言われた時に人は「ゆっくり」か「急ぐ」かそのどちらかにしようとは思わないだろう。それでいてオキシモロンは「アムビギュアス」あるいは「スキゾフレニック」のように双方の概念が混合されきってしまっている事を示唆しない。それらはあくまでそれぞれの単語として分離された状態で存在可能である。スキゾフレニックを語法として考えればそれは多義語のようなもので、二つ以上の語句が混合され、元にあったそれぞれの意味が消失した状態であるといえる。たとえば「ピアノ」と言えば誰しも

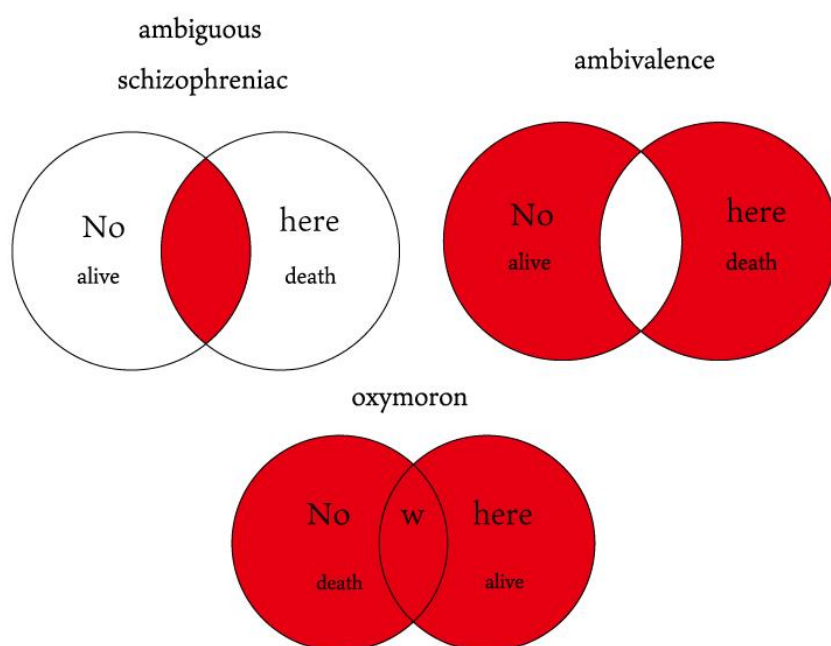


図 13 オキシモロンのベン図

が例の楽器を思い浮かべるだろうが、そもそも「ピアノ」は「グラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ」という名前で、意味としては「小さな音から大きな音まで出すことのできるチェンバロ」であり、現行の「ピアノ（小さな音）」では正式名が持っていた楽器としての歴史性や特有性が失われている。オクシモロンという概念はいわばそれぞれの概念と混合した概念を全て同時に表象することであり、本作『No/w/here/cat』は失踪者、搜索者の二点、あるいは遺族と脳死者という二つの視座を同じ物語に集約することによってこのオクシモロンを体現させていると言える。

この作品の中で著者の立場は事件によって父親を亡くし、現代の医療制度によってあいまいな喪失を余儀なくされた被害者であるが、他方、生命の所有についてレトリカルに考えれば、父親の処分権を持つ権力者であり、加害者である。他者の生や身体を所有する事を受け入れるということは、逆説的に自身の生や身体を他者に所有される事を同定する事である。私たちの現代社会ではそれを否定してきた。資本主義であっても、社会主義であっても、その根底には人々の労働は当事者に還元されるべき、という理念を前提としており、この論理は、労働とは身体で行われるもので、身体とは個人のものであるという基本概念に支持されている。脳死や臓器移植制度を認めるということは、現代において一般化されている主義を、社会を否定する事を意味している。同時に我々現代人は他者との生活の中で非対称的な関係を結ぶ事を受け入れ続けてきた。私たちは時に物質的に、あるいは非物質的に暴力を伴う、支配と呼ばれるようなものから逃れることができないのかもしれない。私たちはどのような場合の支配を許し、どのような暴力を嫌うのだろうか。虫なら殺していいかもしれない。では蛇は？鳥は？は？人は？ 私たちの他者の身体的所有に対する抵抗感の根拠は何で、またどのように変容していくのだろうか。少なからず、本論で展開した論理の根底には、あいまいな喪失から逸脱し、死を明瞭に悲嘆する事を、対象者の心身の健康を考える上では是とした立場を一貫しながらも、対立する概念や視座を同時に存在させるオクシモロンという概念がある。本作のコンセプトを言語に置き換えると、それは「死について考えろ」という事と「死について忘れろ」という相反した主張を同時に表象することである。そうした概念の中で行われる営みは命の誕生への喜びに繋がると確信しているからである。子を成す（産む/授かる）という中動的な営みはこの地に生きる者が宿命づけられた、親子という名の他者と結ぶ最初の非対称的な契約である。『No/w/here/cat』は主人公である僕、つまり筆者である私が、被害者/加害者という二項対立から逸脱し、他者と生の契約を結ぶ事を祝福する物語である。あの時僕のことを所有していた猫は幸せだったであろうか。少なからず、野良猫を所有した僕は彼と素晴らしい時間を過ごすことができた。作家が現代社会を観察し、何某かを公に表現する時、ある事象を埋葬するのではなく、また、曖昧に延命するのでもない、気韻生動を根本に据えた態度で向き合うことが、真摯であることではないだろうか。本論は美術研究において脳死を恒久的なテーマとして捉えており、現代社会にある特異な

現象として脳死を取り上げる制作論を検討するものであり、脳死問題の是非を問うものでもなければ、作品同様、何かしらの課題を乗り越える事を射程としていない。本論はそのような現代社会の処方箋としては一切機能しない。しかし、本論が書かれている 2021 年のいまが、SNS の普及によって他者との繋がりが大きく変容し、他者との関係に疲弊している時代であって、我が国ではジェンダー論や人種差別論が原理的にも、世俗的にも流行し、被害者が加害者へ、加害者が被害者へと様変わりを激しく繰り返しながら、支配のありように関して毎日のように炎上し、またそれを恐れて沈黙する時代であって、新型コロナウイルスの蔓延で世界が混乱し、死は人類が最も避けるべき事象であるという、あまりにも単純すぎるメッセージによって、人々のあらゆる生活が脅迫されている時代にある、という事を書き記しておきたい。死が生物の、支配が文明の敗北であるならば、私たちはこの先もずっと敗北し続けなければならない。本作はそのような現代科学の螺旋から、降りるためにある。

²⁸ Wikipedia「曖昧さ回避」

[<https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E6%9B%96%E6%98%A7%E3%81%95%E5%9B%9E%E9%81%BF>] (最終閲覧日 2022 年 3 月 30 日)

²⁹ 赤瀬川原平, 1964「“資本主義リアリズム”論」『日本読書新聞』日本出版協会

³⁰ 榎木野衣, 1998「日本・現代・美術」新潮社, p.59